

特214

28

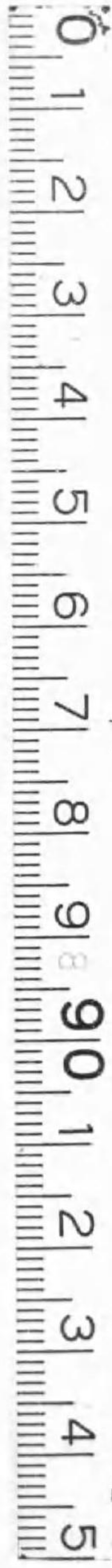
版書科教・庫文波岩

22

世間胸算用

訂校吉萬田和

店書波岩



始



時214
28

143



版書科教・庫文波岩
22

世間胸算用

和萬田吉校訂

岩波書店



343-582

はしがき

「世間胸算用」は井原西鶴が敘述の方面を町人氣質に轉換して、いよ／＼圓運爛熟の境に入つた其五十一歳の筆に係り、「日本永代藏」の作後四年を隔てたものである。一編の旨趣は「永代藏」と姉妹關係を成してゐるが、此は一年の總勘定日に於ける京坂江三都町人社會の情態を精寫して、年頭からの油斷無き勤儉履行を勸説するを特色とする。此く一言すれば乾燥なる倫理書に傾いてゐるやうに聞えるが、そこは浮世の辛酸を嘗め盡し味ひ悉した著者のことであるから、警拔にして而も奇矯に陥らぬ觀察と簡淨にして而も鋭鋒當るべからざる筆致とに例の宛轉窮りなき滑稽みを加へて、覺えず觀者をして一氣讀過せしむる魅力を有つてゐる。之を小説と謂ふは當らぬ。寧ろ前後二十篇の談義的説話の集成であつて、其一篇と一篇との間には筋の聯絡も何も無い。その代り毎篇に必ず把握すべき何ものかがある。もとより此種の遊戯文字からしかつめらしい教訓を受くべく用意する人もあるまいが、作者の寫實主義は此比較的老實なる作物に於ても縦横に發揮せられ、元祿の世相民情を觀るに足る是程の好參考資料を供給するものは他に多くあるまい。此

4
書の特徴がこゝに在りとすれば、此書によつて我等の知識し得るところも意外に多いと謂はれよう。作者晩年の著述であるに拘らず其筆力決して強弩の末を以て論ずべからざることにも注意に價する。

用法語格その他西鶴の文章の特異をあらはすものは悉皆本の儘にして私意を加へざること、本文庫に收めた同一作者の諸書と同じである。殊に漢字の傍訓など嚴正に謂へば訛誤を以て論ずべきものも凡て之を訂さぬことにした。亦本書に於て句讀點の痕を減したことも不思議に思はれようが、此も原本の傳を傳へる爲に態としたのである。篇題の句に或處まで傍訓が存して或處から後失せて居るなど本書中前後の躰制上不一致も讀者の眼に着くことであらうが、これ亦校者の手落で無いことを承了せられたい。

昭和二年十月

校訂者識す

世問胸算用

松の風静に初曙の若多ひすく諸商人買ての幸ひ賣ての仕合扱帳閉棚おろし納め銀の蔵ひらき春のはじめの天秤大黒の打出の小槌何成ともほしき物それくくの智恵袋より取出す事を元日より胸算用油断なく一日千金の大晦日を知るべし

初春

波

西

鶴

胸算用 大晦日は一日千金 卷一

目録

- 一 問屋の寛濶女
はやり小袖は一種白品染
大晦日の振手形如件
- 二 長刀はむかし靴
牢人細工の鯛つり
大晦日の小質屋は泪

三 伊勢海老は春の杓

状の書賃一通一銭

大晦日に隠居の才覚

四 藝鼠の文づかひ

居風呂の中の長物語

大晦日に煤はきの宿

問屋の寛潤女

世の定めとて大晦日は闇なる事天の岩戸の神代このかたしれたる事なるに人みな常に渡世を油断して毎年ひとつの胸算用ちがひ節季を仕廻かね迷惑するは面々覺悟あしき故なり一日千金に替がたし錢銀なくては越れざる冬と春との峠是借錢の山高ふしてのぼり兼たるほだしそれ／＼に子といふものに身體相應のついでに當つて目には見えねど年中につもりてはきだめの中へすたり行はま弓手まりの糸屑此外雛の摺鉢わかれて葛蒲刀の箔の色替り踊たいこをうちやぶり八朔の雀は珠數玉につなぎ捨られ中の亥猪を祝ふ餅の米氏神のおはらひ團子弟子朔日厄拂ひの包錢夢違ひの御札を買など寶舟にも車にも積餘るほどの物入ことに近年はいづかたも女房家ぬり奢りて衣類に事もかゝぬ身の其ときの浮世模やうの正月小袖をたくみ羽二重半疋四十五匁の地絹よりは千種の細染百色かはりの染賃は高く金子一兩宛出して是さのみ人の目たゝぬ事にあたら金銀を捨ける帯とてもむかしわたりの本縹子一幅に一丈二尺一筋につき銀二枚が物を腰にまとひ小判二兩のさし櫛今の直段の米にしては本依三石あたまにいたゞき櫛も本紅の二枚がさね白ぬめの足袋はくなどむかし

は大名の御前かたにもあそばさぬ事おもへば町人の女房の分として冥加おそろしき事ぞかしせめて金銀我ものに持あまりてすればなり降ても照ても晝夜油断のならざる利を出す銀かる人の身體にてかゝる女の寛濶能々分別しては我と我心の恥かしき義なり明日分散にあふても女の諸道具は遁るゝによつて打つぶして又取つき世帯の物種にするかと思はれける惣じて女は鼻のさきにして身體たゞまるゝ宵迄乗ものにふたつ灯挑月夜に無用の外聞聞に錦のうは着湯わかつて水へ入たごとく何の役にも立ざる身の程死れたる親仁持佛堂の隅から見えてうき世の雲を隔れば悔みても異見は成がたし。今の商賣の仕かけ世の偽りの間屋なり十貫目が物を買て八貫目に賣て銀まはしする才覺つまる所は内證のよはり來年の暮には此門の戸に賣家十八間口内に藏三ヶ所、戸立く其まゝ疊上中二百四十疊外に江戸船一艘五人乗の御座ふね通ひ舟付て賣申候來ル正月十九日に此町の會所にて札をひらくと沙汰せられ皆人のものになれば佛の目には見えすきて悲しく定めて佛具も人手に渡るべし中にも唐かねの三ツ具足代々持傳えて惜ければ行先の七月魂祭りの送り火の時蓮の葉に包みて極楽へ取て歸るべし進も此家來年ばかり汝が心根もそれゆへ丹波に大分田地買置引込所拵らへけるは中々無分別なり我賢ければ我に銀借ほどの人も又利發にてひとつく吟

味仕出し皆人の物になる事なりよしなき悪事をたくまんよりは何とぞ今一たび商賣仕返せ死でも子はかはゆさのまゝに林神に立て此事をしらすぞと見し姿ありくとの夢は覺て明ければ十二月二十九日の朝寢所よりも大笑してさてもくけふと明日とのいそかしき中に死んだ親仁の慾の夢見あの三ツ具足お寺へあげよ後の世迄も欲がやまぬ事ぞと親をそしるうちに諸方の借錢乞山のごとし何とか埒を明る事ぞと思ひしに近年銀なしの商人共手前に金銀有ときは利なしに兩替屋へ預け又入時は借る爲にしてこざかしきもの振手形といふ事を仕出して手廻しのたがひによき事なり此亭主も其心得にして霜月の末より銀二十五貫目念比なる兩替屋へ預け置大拂の時米屋も呉服屋も味噌屋紙屋も肴屋も観音講の出し前も揚屋の銀も乞にくるほどの者に其兩替屋で請とれと振手形一枚づつ渡して萬仕廻ふたとて年籠りの住吉參胸には波のたゞぬ間もなしこんな人の初尾はうけ給ふてから氣づかひし給ふべしされば其振手形は二十五貫目に八十貫目あまりの手形持かくる程に兩替には算用差引して後に渡そう振手形大分有とさまく詮議するうちに又掛乞も其手形を先へ渡し又先からさきへ渡し後にはどさくさと入みだれ時の明ぬ振手形を銀の替りに握りて年を取ける一夜明れば懸かなる春とぞなりける

二 長刀はむかしの靴

元朝に日蝕六十九年以前に有て又元祿五年みづのえさる程に此曙めづらし曆は持統天皇四年に儀鳳曆より改りて日月の蝕をこよみの證據に世の人は疑ふ事なし口より見盡して未一段の大晦日になりて浮瑠り小うたの聲も出すけふ一日の暮せはしくこと更小家がちなる所は喧嘩と洗濯と壁下地つゞくると何もかも一度に取ませて春の用意とていかな事餅ひとつ小鯨一匹もなし世に有人と見くらべて淺間敷哀れなり此合借屋六七軒何として年を取事ぞと思ひしにみな質だねの心當あればすこしも世をなげく風情なし常住身の取置屋賃其晦日切にすます其外に萬の世帯道具あるひは米味噌焼酎醬油鹽あふら返も借人なければ万事當座買にして朝夕を送れば節季々々に帳さげて案内なしにうちへ入るものひとりもなく誰におそれ託言をするかたもなく樂みけ貧賤にありと古人の詞反古にならず書出し請て濟さぬは世にまぎれて住ける晝盜人に同じ是を思ふに人みな年中の高ぐくりばかりして毎月の胸算用せぬによつてつばめのあはぬ事ぞかし。其日進の身は知たる世帯なれば小つかひ帳ひとつ附る迄もない事なりさる程に大晦日の暮方まで不斷の體に

て正月の事ども何として埒明るぞと思ひしにそれ／＼に質を置ける覺悟有て身仕廻るこそ哀れなれ一軒からは古き傘一本に綿線ひとつ茶釜一つかれこれ三色にて銀一匁借て事すましける又其隣にはかゝが不斷帶くはんせこよりに仕かへて一すじ男の木綿頭巾ひとつ蓋なしの小重箱一組七つ半の箆一丁五合升壹合升二つ漆焼の石皿五枚釣御前に佛の道具添て取集て二十三色にて一匁六分借て年を取ける其ひがし隣には舞々住けるが元日より大黒舞に商賣を替ければ五文の面張貫の槌ひとつにて正月中は口過すれば此烏帽子ひたれ大口はいらぬ物とて二匁七分の質に置いてゆるりと年を越ける其隣はむつかしき紙子半人武器馬具年久しく賣喰にして小刀細工に馬の尾にてしかけたる鯛釣もはやりやめば今といふと小尻さしまりて一夜を越べき才覺なく似せ梨地の長刀の鞘をひとつ質屋へもたしてつかはしけるにこんなものが何の役に立べしと手にしばしももたずなげ戻しければ半人の女房其儘氣色を替人の大事の道具を何とてなげてそこなひけるぞ質にいやならばいやですむ事なり其上何の役にたぬとは爰が聞所じやそれはわれらが親石田治部少輔亂にならびなき手からあそばしたる長刀なれども男子なき故にわたくしに譲り給はり世に有時の嫁人に對の挾箱のさきへもたせたるに役にたぬものとは先祖の取女にこそ生れたれ命はをしま

ぬ相手は亭主と取付て泣出せばあるじ迷惑してさま／＼詫てもきかず其うちに近所の者集りてあ
 のつれあひ牢人はねだりものなれば聞つけ來ぬうちに是をあつかへといづれも亭主にさゝやき鏡
 三百と黒米三升にてやう／＼にすましける扱も時世かな此女もむかしは千二百石取たる人の息女
 萬を花車にてくらしせし身なれ共今の貧につれて無理なる事に人をねだるとは身に覺て口おし是を
 見るにも貧にては死れぬものぞかしすでに噎ひ濟て三百三升請取り此黒米取て歸りて明日の用に
 たゝぬといへば幸ひこれに確有とてかしてふまして歸しける是ぞ世にいふさはり三百なるべし
 又牢人の隣に年ごろ三十七八ばかりの女親類とてもかゝるべき子もなくひとり身なりしが五六年
 跡に男にはなれたるよしにて髪を切紋なしのものは着ども身のたしなみは目だゝぬやうにして昔
 を捨すしかもすがたもさもしからず常住は奈良寺を慰みのやうにひねりて目をくらせしがはや極
 月初に万事を手廻しよく仕廻て割木も二三月迄のたくはへ着かけには二番の鱒一本小鯛五枚鱈二
 本かんばしぬりばし紀伊國五器鍋ぶた迄さらりと新しく仕替て家主殿へ目ぐる一本娘御に絹緒の
 小雪踏お内儀様へうね足袋一足七軒の合借家へ餅に午房一把つつ添て禮義正しくとしを取ける人
 のしらぬ渡世何をかして内證の事はしらず其奥の相住に二人の女ありしが一人は年も若く耳も目

鼻も世の人に替る事なくて一生ひとり過して悲しく鏡見るたびに我ながらよこでうつて是では人
 も合點せぬ管と身の程を觀しける又一人は東海道關の地藏に近き旅籠屋の出女せし時木賃泊りの
 ぬけ参りにつらくあたり米など盗みし科にや同じ世に報ひて米の乏しき鉢ひらき坊主となりて顔
 を殊勝らしく作り心の外の空念佛思へば心の鬼狼に衣ぞかし精進の事は忘れて鱒の頭も信心か
 らとて墨染の麻衣を着ゆへに此十四五年も佛のお影にて毎朝修行に出しに一町にて二とところ宛の
 手の中二十所を集めて漸一合有五十町懸廻らねば米五合はなし道心も堅固になくは勤めがた
 し過にし夏くはくらんをわづらひてせんかたなく衣を一匁八分の質に置けるがそののち請る事成
 がたく渡世の種につきける人の後世信心に替る事はなきに衣を着たる朝は米五合ももらはれ衣な
 しには二合も勸進なし殊に極月坊主とて此月はいそがしきに取まされ親の命日もわすれくれねば
 是非もなく鏡八文にて年をこしけるまことに世の中の哀れを見る事貧家の邊りの小質屋心よはく
 てはならぬ事なり胸から見るさへ悲しきことの數々なる年のくれにぞありける

神の松山草むかしより毎年かざり付たる蓬萊にいせゑびなくては有つけたるもの一色にて春の心ならず其年によりて各別ねだんの高き事有て貧家又は始末なる宿には是を買すに祝儀をすましぬ此前も代々の年ぎれしてひとつを四五分づつの賣買なれば此替に九年母にて婿を明ける是は大かた色かたちも似たりよつたりの物成しが伊勢ゑびの名代に車ゑびいかにしてもかり着のごとくない袖ふる人は是非もなし世間をはつて棟のたかき内には、それほどの風があたつて北雨吹の壁に筵こも成がたし滌墨の色付板包むなどこれらは吝にあらず分際相應に人間衣食住の三つの樂の外なし家業は何にても親の仕似せたる事を替て利を得たるは稀なり兎角老たる人のさしづをもるゝ事なかれ何ほど利發才覺にしても若き人には三五の十八ばらりと違ふ事數々なりざるほどに大坂の大節季よろづ寶の市ぞかし商ひ事がないゝといふは六十年此かた何が賣あまりて捨たる物なしひとつ求めれば其身一代子孫までも譲り傳へる換確さへ日々年々に御影山も切つくすべしまして蓮の葉物五月の甲正月の祝ひ道具はわづか朔日二日三日坊主寺から里への禮扇これらは明ずり捨りて世のつるえかまはず人の氣江戸につゞいて寛濶なる所なりたとへ千貫すればとて伊勢ゑびなしに蓬萊を飭りがたしと家々に調ければ極月二十七八日所々の魚の棚に買あげて

唐物のごとく次第にむつかしくはや大晦日には髭もちりもなかりけり浦の苦屋の紅葉をたづね伊勢ゑびないかゝといふ聲ばかり備後町の中ほどに永來といへる着屋に只ひとつ有しを一匁五分を付出し四匁八分迄にのぞめども中々當年のきれ物とて賣されば使がはからひにも成がたくいそぎ宿に歸りて海老の高き事を申せば親父十面つくりてわれ一代のうち高ひもの買たる事なし断は六月綿は八月米は新酒作らぬ前奈良晒は毎年盆過て貴置、年中現銀にして勝手よき事斗此以前父親の相はてられし時棺桶ひとつ樽屋まかせに買かづきて今に心かかりなり伊勢ゑびがなふて年のとられぬといふ事有まじひとつ三文する年ふたつ買ふて算用を合すべしなもの喰ふと云年徳の神は御座らいでもくるしうない事四匁が四分にてもゑびは沙汰のない事と機嫌わるしされ共内義男子とひとつになつて世間はともあれ聲が始めて禮にわけて伊勢ゑびなしの蓬萊が出さるゝものか何ほどにてもそれを買と重て人をつかはしければはや今極筋の間屋の若ひもの買取て尤五匁八分にねだんは定めたれども正月のいはるの物はしたがねは心にかゝると錢五百やりてゑび取て歸る其跡にて色々穿鑿すれ共繪にかこふもなかりき是に付ても此津のひろき事思ひあたりし宿に歸りて此事を語れば内義は後悔らしき良つきおやぢは是を笑ふて其間屋心もとなし追付分散に

あふべきもの也内證しらずしてさやうの間屋銀をかしかけたる人の夢見悪かるべし蓬萊に海老がなふて叶はずは跡の捨らぬ分別有とて細工人にあつらへて物の見事に紅ぎぬにて張ぬきにして二匁五分にて出来けり正月の祝儀仕廻ふて後子共がもちあそびにもなるぞかし人の智慧はこんな事ぞ四匁五分を二匁五分で埒をあけしかも跡の用に立事とおやぢ長談義をとかれしにいづれも道理につまり是程に身體持かためたる人の才覺は各別と耳をすまして聞所へ此親仁の母親裏に隠居して當年九十二なれ共目がよく足立ちて面屋へきたりきけば伊勢まびの高ひせんさくけふまでそれを買すに置事去とては氣のつかぬ者共よそんな事で此世帯がもたるゝものかいつとも年越の春あるときは海老が高ひと心得よ其子細は伊勢の宮々御師の宿々あるひは町中在々所々迄も此一國は神國なれば日本の諸神を家々に祭るによつて海老何百萬と云限もなふ人事なり毎年京大坂へくるは此神々に備へたる跡の祭り也此祖母はそれを考此月の中比に髭もつかずに生ながらのを、四文づつにて貳つ買て置たと出されしに皆々横手を打御隠居にはひとつですみます物を二つは香つた事と申せば、こちに當所のない事はいたさぬ定まつて畑午房五把ふとければ、三把くるゝ人があるそれほどの物を返すそこへ此えびにて一匁が午房四文がものですす合點じや今に歳暮も

のもてこぬが爰の仕合去ながらいかに親子の中でもたがひの算用あひは急度したがよい海老がほしくは五把もたして取におこしやどの道にも午房に替る伊勢まびいづれ祝ひの物に是がなふてもよいはといふてはおかれぬものじや慾心でいふではなけれ共惣して五節句の取やり先から来た物を能々ねうちしてそれ程に見えて少づつ徳のいくやうにして返す物しや毎年太夫殿から御藏箱に鯉節一連はらや一箱折本のこよみ正眞の青苔五把かれこれこまかにねだん付て二匁八分がもの申請て銀三匁御初尾上れば高で二分あまりてお伊勢様も損のゆかぬやうに此家三十年仕來つたにそち世をわたしてから銀壹枚づつ上らるゝ事いかに神の信心なればとていはれざる事なり太神宮にも算用なしに物つかふ人うれしくは思しめさすそのためしに散錢さへ一貫といふを六百の鴈の目を拵らへ置宮めぐりにも随分物のいらぬやうにあそばしけるさる程に慾の世の中百二十末社の中にも錢の多きは惠美酒大黒多賀は命神住よしの船玉出雲は仲人の神鏡の宮は娘の顔をうつくしうなさるゝ神山王は二十一人下々をつかはさしやる神いなり殿は身體の尾が見えぬやうに守らつしやる神と宮すゝめ聲々に商ひ口をたく皆是さし當つて耳よりなる神なればこれらにはお初尾上て其外の神のまへは殊勝にてさびしき神さへ錢もうけ只はならぬ世なればまして人間油断す

る事なかれ伊勢より例年諸國へ且那廻りの祝儀狀大分の事なれば能筆に手間賃にて書せけるに一通一文づつにて大晦日から大晦日迄書くらして、同じ事に氣をつくし年中に二百文取日は一日もなし神前長久民安全、御祈念のため口過のため也

四 風の文づかひ

毎年煤拂は極月十三日に定めて且那寺の笹竹を祝ひ物とて月の數十二本もらひて煤を拂ての跡を取葺屋根の押へ竹につかひ枝は筈に結せて塵もほこりもすてぬ随分こまかなる人有ける過し年は十三日にいそがしく大晦日に煤はきて年に一度の水風呂を焼れしに五月の粽のから盆の蓮の葉迄も段々ため置湯のわくに違ひはなしとてこまかな事に氣をつけて世のつるへせんさく人に過て利發かほする男有同じ屋敷の裏に隠居たてゝ母親の仕れしが此男うまれたる母なれば其しはき事がぎりなしぬり下駄片足なるを水風呂の下へ焼時つくゝむかしを思ひ出しまことに此木履はわれ十八の時此家に嫁入せし時雜長持に入て來てそれから雨にも雪にもはきて羽のちびたるばかり五十二年になりぬ我一代は一足にて埒を明んとおもひしに惜や片足は野ら犬めに喰へられはし

たになりて是非もなくけふ煙になす事よと四五度もくりことをいひて其後釜の中へなげ捨られ今ひとつ何やら物思ひの風情して泪をはらくとこぼし世に月日のたつは夢じや明日は其むかはりになるが惜い事をしましたとしばしなげきのやみがたし折ふし近所の醫者水風呂にいられしが先以目出たき年のくれなれば御なげきをやめさせ給へしてそれは元日にどなたの御死去なされたと尋られしにいかに愚智なればとて人の生死を是程になげく事では御座らぬわたくしの惜むは去年の元日に堺の妹が禮に參つて年玉銀一包くれしを何ほどかうれしく惠方棚へあげ置しに其夜盗まれましたそもや勝手しらぬ者の取事では御座らぬ其後色々の願を諸神にかけますれ共其甲斐もなし又山伏に祈を頼みましたれば此銀七日のうちに出来ますればだんの上なる御幣がうごき、御灯が次第に消ますが大願の成就せししといひけるあんのごとく祈り最中に御幣ゆるぎ出ともし火かすかになりて消ける是は神佛の事末世ならず有がたき御事と思ひお初尾百二十上て七日待ども此銀は出さざる人に語りければそれは盗人においといふ物なり今時は仕かけ山伏とてさままごごまの壇にからくりいたし白紙人形に土佐踊さすなど此まへ松田といふ放下しがしたる事なれ共皆人賢過て結句近き事にはまりぬ其御幣のうごき出るは立置たる岩座に壺有て其中に鱒を生置ける

珠數さらく／＼と押搦で東方に西方にとつかう錫杖にて佛壇をあらけなくうては齋が是におどろき上を下へとさはぎ幣串にあたればしばらく動きてしらぬ目からはおそろし又灯明は臺に砂時計を仕くはし油をぬき取事ぞと此物がたりを聞からいよく損のうへの損をいたした我此年まで錢一文落さずにくらせしに今年の大晦日は、此銀の見えぬゆへ胸算用ちがひて心がかりの正月をいたせばよろづの事おもしろからずと世の外聞もかまはず大聲あげて泣ければ家内の者ども興をさまし我々疑るゝ事の迷惑と心々に諸禪にきせいをかけける大かた煤もはき仕廻て、屋ねうらまであらためける時棟木の間より杉はら紙の一包をさがし出しよく見れば隠居の尋ねらるゝ年玉銀にまぎれなし人の盗まぬものは出まするぞさるほどに悪ひ鼠目といへばお祖母中々合點せられず是ほど遠ありきたす鼠を見た事なしあたまの黒ひねつみの業是からは油斷のならぬ事と疊たゝきてわめかれければ導師水風呂よりあがりかゝる事には古代にもためしあり仁王三十七代孝徳天皇の御時大化元年十二月晦日に大和の國岡本の都を難波長柄の豊崎に移させ給へば和州の鼠もつれて宿替しけるにそれ／＼の世帯道具をばはこぶこそおかしけれ穴をくろめし古綿蔦にかくるゝ紙ふすま猫の見付けぬ守り袋、麩の道切るとがり杭、枡おとしのかいづめ油火を消板き

れ鯉節引てこまくら其外婢入の時の鬘斗こまめのかしら熊野参りの小米つと迄二日路ある所をくはへてはこびければまして隠居と面屋わづかの所引まじき事にあらずと年代記を引て申せど中々同心いたされず口がしこくは仰らるれ共目前に見ぬ事はまことにならぬと申されれば何ともせんかたなくやう／＼案じ出し長崎水右衛門がしいれたる鼠つかひの藤兵衛をやとひにつかはし只今あの鼠が人のいふ事を聞入てさま／＼の藝づくし若ひ衆にたのまれ戀の文づかひといへば封じたる文くはへて跡先を見廻し人の袖口より文を入れる又錢一文たげて是で餅かふて来いといへば錢を置て餅くはへて戻る何と／＼我を折給へといへば是を見れば鼠も包かねを引まじきものにあらずさてはうたがひはれました去ながらかゝる盗み心のある鼠を宿しられたるふしやうにまん丸一年此銀をあそばして置たる利銀を急度おもやからすまし給へといひかゝり一割半の算用にして十二月晦日の夜請取本の正月をするとて此祖母ひとり寝をせられける

胸算用

大晦日は一日千金

卷二

目録

一 銀壹匁の講中

- 長町につとく嫁入荷物
- 大晦日の祝儀紙子一疋

二 訛言も只はきかぬ宿

- 何の沙汰なき取あげ祖母
- 大晦日のなげぶしもうたひ所

三 尤始末の異見

青寐の久三がはたらき
大晦日の山耕の粉うり

四 門柱も皆かりの世

朱雀の鳥おとし
大晦日の喧嘩屋敷

一 銀一匁の講中

人の分限になる事仕合といふは言葉まことに面々の智慧才覚を以てかせぎ出し其家榮ゆる事ぞかし是福の神のゑびす殿のまゝにもならぬ事なり大黒講をむすび當地の手前よろしき者共集り諸國の大名衆への御用銀の借入の内談を酒宴遊興よりは増たる世の慰みとおもひ定めて寄合座敷も色ちかき所をさつて生玉下寺町の客庵を借りて毎月身體僉議にくれて命の入日かたふく老體とも後世の事はわすれて只利銀のかさなり富貴になる事を樂しみける世に金銀の餘慶有ほど萬に付て目出たき事外になけれ共それは二十五の若盛より油斷なく三十五の男盛にかせぎ五十の分別ざかりに家を納め物領に万事をわたし六十の前年より樂隠居して寺道場へまゐり下向して世間むきのよき時分なるに佛とも法ともわかまへず欲の世の中に住り死ば萬貫持てもかたびら一つより皆うき世に残るぞかし此寄合の親仁共二千貫目より内の分限壹人もなし又近年我々がはたらきにてわづかなる身體の者共金銀を仕出し二百貫目三百貫目あるひは五百貫目までの銀持二十八人かたらひ壹匁講といふ事をむすび毎月宿も定めず一匁の仕出し飯もあつらへ下戸も上戸も酒なしにあそ

び事にも始末第一氣のつまるせんさく也朝から日のくるるまでよの事なしに身過の沙汰中にも借銀の儘かなる借手を吟味して一日も銀をあそばさぬ思案をめぐらしける此者共が手前よろしく成けるはじめ利銀取込の分限なれば今の世の商賣に銀かし屋より外によき事はなし然れども今程は見せかけのよき内證の不埒なる商人大分かりこみこしらへてたふれければ思ひもよらぬ損をする事たび／＼也されども人を氣づかひして金銀借すにも置れず随分内證を聞合せ此仲間はたがひに様子をしらせ向後は借人をいたすべしづれもかく言合すからは出しぬきにあはし給ふなさあらば各心得のために當地で定まつて銀かる人をひとり／＼書出しこまかに詮議して見るべしこれ尤なり先北瀬で何屋の誰財寶諸色かけて七百貫目の身體といひ出れば其見立は各別八百五十貫目の借銀といふ此有なしの相違に一座の衆中肝をつぶし爰が大事のせんさく兩方のおぼしめし入とくと承はり人々の心得のためとぞ聞ける先分限と見たる所は去々年の霜月に娘を擧へ縁組せしに諸道具今宮から長町の藤の丸のからやく屋の門までつゞきし跡から十貫目入五つ青竹にて揃への大男にさし荷はせ其まゝ御祓の渡ることし外にもあまたの男子あれば餘慶なくて娘に五十貫目は付まいと思ひましていやといふものを無理に此三月過に二十貫目預けましたといはるゝ扱々

お笑止や其二十貫目が一貫六百目ばかりで戻るで御座ろといへば此親仁顔色かはつて箸もちながら集め汁喉を通らず今日の寄合に口おしき事を聞けると様子をきかぬ内から涙をこぼされけるとてもその事に其内證が聞たしされば其聲どのかたもよく／＼せはしければこそ、芝居並の利銀にて何程でも借らるゝなり此利をかきて芝居の外何商賣して胸算用があふとおぼしめすぞ十貫目箱壹つはかなものまでうつて三匁五分つ拾七匁五分で箱五つ中には世間にたくさんなる石瓦人の心ほどおそろしきものは御座らぬ兩方の外聞見せかけばかりに内談と存するわれらは其箱を明て正眞の丁銀にしてからまことにはいたさぬあの身體の數銀は二百枚も過ものこしらへなしに五貫目何と各われらが沙汰する所が違ふたか先あれには一兩年二貫目ばかり預けて見てそれに別の事なくば又四貫目程五六年もかして、儘かなる事を見とゞけての二十貫目といへば一座是尤と同音に申段々利につまつて此親仁歸りには足腰立すしてなげき我此年まで人の身體見違へし事なきに此たびはふかくなる事をいたしましたと男泣にして何とぞ御分別はないか／＼とあれば時に最前のせちがしこき人のいふは千日千夜御思案なされても此銀子無事に取かへす工夫は只ひとつより外になし此傳授上上の袖一疋ならば儘かに取かへして進上申といへばそれは／＼申わたまで添まし

て御禮申さう何とぞ頼むといふ然らば只今迄より念比に仕かけ天満の舟祭りが見ゆるこそ幸はひなれ濱にかけたる棧敷へ女房どもをおこして見せたと廿五日にお内義をやりてさきのかゝとしてみく内證をかたらせ一日あそぶうちに男子どもが馳走に出るはしれた事じや時に二番目のむすこが生れつきをほめ出しかしこそなる眼ざしこなたの御子息にしてはお心に掛さしやるな意が孔雀を産んだとは此子の事玉のやうなる美人ちかごろ押付たる所望なれどもわたくしもらひまして舞にいたします酒ひとつ過しましていふでは御座らぬわれらが子ながらこれ娘も十人並よ其うへ親仁のひとり子なれば五十貫目付てやるとはつねの覺悟又われらがわたくしがね三百五十兩長堀の角屋敷捨うりにしても二十五貫目かもの仕てから袖も通さぬ衣裳六十五ひとりの娘より外にやるものが御座らぬ是がこちの舞殿と思ひ入たる貞つきして是を言葉のはじめにして其後折ふしすこしづつ物をやればかへしを請是以損のいかぬ事それよりよいほどを見合せやとひにかはし銀掛るそばに置いて敷をよませこくみんをうたせ内蔵へはこばせなどして一日つかふて歸し其のちさきの身になる人を見てひそかによびにつかはし其人の二番目の子を女房どもが何と思ひ入ましたやら是非にと望みまいらすいそがぬ事ながら次而もあらば此方の娘を囁ふてもくださる

かたづねてくだされこなたへ取つくるふて申事も御座らぬ銀千枚はいつかたへやりますととも其心得と云わたり先へ通じたと思ふ時分に内々の預け銀人用と申つかはせば欲から才覺して済す事手にとつたやうなり此仕かけの外有まじといひおしへてわかれる其年の大晦日にかの親仁門口より笑ひ込御影く御かけにて右の銀子元利ともに二三日前に請取ましたこなたのやうなる智慧袋は銀かし仲間の重寶くとあたたまをたゞき扱其時は袖一疋とは申せしが是にて御勘忍あれと白石の紐子二たんさし出して申わたりは春の事といひ捨て歸りける

二 訛言も只はきかぬ宿

萬人ともに月額剃て髪結ふて衣裳着更て出た所は皆正月の景色ぞかし人こそしらね年のとりやうこそさまなくなれ内證の逆も埒のあかざる人は買がかり万事一軒へも拂はぬ胸算用を極め大晦日の朝飯過るといやや羽織脇ざしきげんのわるい内義に物には勘忍といふ事があるすこし手前取直したらば駕籠にのせる時節もまたあるものぞ夕べの鴨の残りを酒いりにして喰やれ掛どもをあつめて来たたらば先をなたの寶引錢一貫のけて置いて有次第に拂ふてない所はまゝにして相乞の

貞を見ぬやうにこちらむきて寝ていやれと口ばやにいひ捨てて出行商人何として身體つよくべし一日々物のたらぬこしらへおのれも合點ながら俄かに分別も成がたしこんな者の女房になる事世の因果にて子をもたぬうちに年をよらしける一錢も大事の日鼻紙入に壹歩二つ三つ豆板三十目ばかりも入てかゝりのない茶屋に行て爰にはまだ得しまはぬかして取みだしたる書出し千束のごとし。是皆ひとつにしてから高で二貫目か三貫目人の家にはそれ／＼の物入われらが所は呉服屋へばかり六貫五百目・物好過たる奥様に迷惑いたすさりと隙あけて此入目を女郎ぐるひにいたすで御座る去ながらさらぬ事は三月からお中において日もあるに今朝からけがつきてけふ生るゝとてうまれぬさきの禍さだめ乳母をつれてくるやら三人四人の取あげ祖母日那山伏が来て變生男子の行ひ千代の腹帯子安貝左りの手に握るといふ海馬をさいかくするやら不斷醫者は次の間に鍋を仕かけはやめ薬の用意何に入事じややら松茸の石づき迄取よせて廻が来てせはをやくさても／＼やかましい事かなされどもあなたは内に御座らぬものといふを幸はひにふらくと爰へ御見廻申したわれらが身體しらぬ人はもしは借錢こはれて出違ふかとおもふもあれば氣味かわる此島中に一錢も指引なしの男ことに現銀にて子のできるまでの宿をかし給ふか爰のさかなかけの鱒

がちいさくてわれら氣にいらぬ早々買給へと一かく投出せば是はうれしや亭主に隠しましてほしき帯よ／＼と笑ひ此年のくれには心よきお客の御出来年中の仕合はしれた事さて臺所はあまりしやれ過ましたちと奥へと申馳走も常に替りてすき合點かといふ樽の酒のかんするもおかし其のちかゝは鼻占おきて三度までいたして同じ事御男子さまに極まりましたとかゝが推量と客の跡かたもなきうそとひとつに成けるあそび所の氣ざんじは大晦日の色三絃誰はゞからぬなげぶしなげきなからも月日を送りけふ一日にない事心にものおもふゆへなり常はくるるを惜みしに各別の事ぞかし女は勤とて心を春のごとくにしておかしうないを笑かほしてひとつ／＼行年のかなしや、此まへは正月のくるをはねつく事にうれしかりしにはや十九になりける追付脇差きてかゝといはるへしふり袖の名残もことしばかりといふ此客わるい事には覺えつよく汝此まへ花屋に居し時は丸袖にてつとめ京で十九といふた事大かた二十年にあまるせんざくすれば三十九のふりそでうき世に何か名残あるへし小作りにうまれ付たる徳とあたまおさへてむかしをかたれば此女ゆるし給へと手を合せ氣のつまる年せんざくやめてうちとけて夢むすぶうちに此女の母親らしきもの來てひそかによび出しひとつふたつ物いひしが何の事はない是か貌の見おさめ十四奴の事に身をな

けるといふ此女泪ぐみて今までうへに着たるぐんない島の小袖をふるしきづつみに手まはしはやくして親にわたすありさまいかにも見かねて又一かくとらせて戻し心おもしろう聲高に物いふを聞付若衆のさうり取めきたる者二人つけこみて旦那これに御座ります御宿へけさから四五度もまいれとお留守は是非なし御目にかゝること幸はひと何やらつめひらきしてのち銀有次第弱織わきざしきるものひとつ預かり跡は正月五日までにといひ捨て歸る此おきやくしゆびあしく人にいひかけられて合力せねばならずとかく節季に出ありくがわるひとこれにも分別がほして夜の明かたに爰を歸るたはけといふはすこし脈がある人の事と笑ふて果しける

三 尤始末の異見

所務わけのたいほうはたとへば千貫目の身體なれば總領に四百貫目居室に付て渡し二男に三百貫目外に家屋敷を調へゆづり三男は百貫目付他家へ養子につかはしもし又娘あれば三十貫目の數銀に、二十貫目の諸道具こしらへて我相應よりかるき縁組よしむかしは四十貫目が仕入して拾貫目の數銀せしが當代は銀をよぶ人心なればぬり長持に丁銀雜長持に錢を入て送るべしすこし娘子は

らうそくの火にては見せにくい貞にても三十貫目が花に咲て花よめさまともてはやし何が手前者の子にてちいさい時からうまいものばかりでそだてられ頬さきの握り出したる丸がほも見よし又額のひよつと出たもかつきの着ぶりがよいものなり鼻の穴のひろきは息つかひのせはしき事なし髪はすくなきは夏涼しく腰のふときはちかけ小袖を不斷めせば是もよし爪はづれのたくまじきはとりあげば、が首すじへ取つためによしと十難をひとつくよしなにひなし爰が大事の胸算用三十貫目の銀を體かに六にして預けて毎月百八十日づつおさまれば是て四人の口過はゆるり内義に腰元仲居女物師を添て我もの喰なから人の機嫌を取嫁すみぢんも心に如在も欲もなきお留守人うつくしきが見たくば其色里にそれにばかりこしらへて夜でも夜中ても御座りませいそれはく、おもしろふて起別るゝと七十一匁のかね幣はく、おもしろからずつらつらおもんみるに揚屋の酒小さかつきに二盃四分づつにもり若衆宿のならちや一盃八分づつにあたるといへり是を氣を付て見れば各別高ひものながら是十銅の一盃とて何のやうなし義理もかきて戀もやめて喰にげ大じんにあふ事多しなからそれとて乞かたく其客死分にしてさらりと帳を消し置ておのれ後の世に餓鬼と成料理このみして喰ふた姿鳥も杉焼もくはつくと燃あがりて目におそろしく食代

すまさぬ事思ひしるべしと亭主は火箸にて火鉢たゞきてうらみけるありさま飛騨島の羽織もらふた時の顔つきに引かへておそろし惣して遊興もよいほどにやむべし仕舞の見事なるは種なり是をおもへばおもしろからずとも堪忍をして我内の心やすく夜食は冷食に湯とうふ干ぎかな有あいに借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄しをさせことばりなしに高枕して腰元こしもとに足のゆびをひかせ茶は寝ながら内義にもたせ置て手も出さずに飲かれとも面々の龜將軍此内につゞく兵ものなればたれか外よりとがむる人なく樂みは是で濟事なり旦那うちだんなうちにみらるゝとて表の若ひ者ともゝ八坂へ出かくる無分別をやめ又御池あたりの奉公人宿へ忍びの約束もおのづからとまりて只はみられず江戸状どもをさらへ失念したる事どもを見出し主人の徳のゆく事有捨る反古こよりにひねるでつちは又内かたへきこゆる程手本よみて手ならひするは其身の徳なり寢の久七も鯛つゝみたる孤をほどきて銭さしをなへばたけは朝手まはしあしきとて蕪菜そろへけるお物師は日野ぎぬのふしを一日仕事取ける猫さへ眼三寸まいたを見ぬきさかなかけごとりとしても聲を出して守りける旦那一人宿にみらるゝ徳一夜にさへ何程かまして年中につもりては大分の事ぞかしすこしお内義氣にいらぬ所あらふともそこを了簡し給ひてわけ里は皆うそとさへおもへばやむもの爰見

付る若世のおさまる所と京都物になれたる仲人口にて節季の果に長物がたり耳の役に聞てもあしからぬ事なりさるほどに今時の女見るを見まねによき色姿に風俗をうつしける都の吳服棚の奥さまといはるゝ程の人皆遊女に取違へる仕出しなり又手代あがりの内義はおしなへて風呂屋ものに生移しそれより横町の仕たて物屋縫はく屋の女房は其まゝ茶屋者の風義にてそれ〴〵に身體ほどの色を作りておかしせんぎして見るに、傾城と地女に別に替つた事もなければ第一氣がどんで物がくどふていやしい所があつて文の書やうが違ふて酒の吞ぶりが下手で將うたふ事がならひで衣裳つきが取ひろげて立居があふなふて道中が腰がふらふらとして床で味噌鹽の事をいひ出して始末で鼻紙一枚づつつかふて伽羅は飲ぐすと覺えて萬に氣のつまるばかり髪かしらけ大かた似たものといへば同じ事にいふも愚かなり女郎くるひする程のものにうときはひとりもなし其かしくきやつが此もうけにくい金銀を乞つめらるゝ借銀目安付られし、預かり銀のかたへは濟さずして大分物人の正月を請合ひ、万事の入用をはや極月十三日にことはじめとてつかはしけるよくよくおもしろければこそなれ爰は分別の外ぞかし烏丸通り歴々の兄弟に有銀五百貫目づつ譲りわたされけるに弟は次第に仕出し程なく二千貫目と一門のうちからさす程なるに兄は譲りけて四年目

の大晦日に天道は人を殺し給はず今宵月夜ならばむかしを思ひ出して是が賣にあるかるゝものか闇て手くだがなる事と緞子頭巾ふか／＼とかふり山椒の粉こせうの粉を賣まはりてかなしき年を取心うかうかと丹波口まで行うち夜は明がたになりぬ世にある時の朝ごみ思ひ出してぞ歸りし

四 門柱も皆かりの世

惣して物に馴てはもの罪をせぬものぞかし都のあそび所島ばらの入口を小うたにうとふ朱雀の細道といふ野邊なり秋の田のみのる折ふし諸鳥をおどすために案山子をこしらへふるきあみ等を前せ竹杖をつかせ置しに煮鳥も不斷焼印の大あみ笠を見付てこれも供なしの大じんと思ひすこしもおどろかずのちは笠の上にもとまり案山子を餌こかしにあはせけるされば世の中に借錢乞に出あふほどおそろしきものはまたもなきに數年負つけたるものは大晦日にも出違はずむかしが今に借錢にて首切られたるためしもなく有るものやらで置てはなしやりたけれ共ないものはなしおもふまゝなら今の間に銀のなる木をほしやさてもまかぬ種ははへぬものかたと庭木の片隅の日のあた

る所に古むしろを敷庖丁まなばしの切刃を摩付てせつかく澁おとしてから小鯛一疋切事にはあらねども人の氣はしれぬもの今にも俄に腹のたつ事が出来て自害する用にも立事もあるべし我年つもつて五十六命のおしき事はなきに中京の分限者の腹はれ共が因果と若死しけるにわれらが買がゝりざらりと濟してくれるならば氏神稻荷大明神も照覽あれ偽はりなしに腹かき切て身がはりに立と其まゝ狐付の眼して庖丁取まはす所へ唐丸嘴ならして來るおのれ死出のかどでにと細首うちおとせば是を見て掛乞ども肝をつぶし無分別ものに言葉賣とられてはむつかしひとり／＼歸りさまに茶釜のさきに立ながらあんな氣の短かひ男に添しやるお内義が縁とは申ながらいとしい事じやおの／＼いひ捨て歸りける是ある手ながら手のわるひ筒季仕舞なり何の訛言もせずにはらりと埒を明ける其かけごひの中にほり川の材木屋の小者いまだ十八九の角前がみしかもよはよはとして女のやうなる生れ付にて心のつよき所有者若ひ者なりしが亭主がおどし仕かけのうちにはまはす竹縁に腰かけて袂より珠數取出して一粒づつくりて口の中にて稱名となへて居しが人もなく事しづまつて後さて狂言は果たさうに御座るわたくしかたの請取て歸りましよと申せば男盛りりの者どもさへ了簡して歸るにおのれ一人跡に残り物をす細らしく人のする事を狂言とは此いそ

がしき中に無用の死むようのしてんこうと存じた其その僉議きんぎいらぬ事とかくとらねば歸らぬ何を銀子を何ものが
 とる何もの取が我等が得もの傍輩ぼうばいあまたの中に人の手にあまつてとりにくいかけ斗たうを二十七軒わ
 たくし請取此帳面見給へ二十六軒取濟して爰ばかりとらでは歸らぬ所此銀濟ぬちの内普請うちの内普請なさ
 れた材木ざいもくはこちのものさらば取て歸らんと門口の柱から大榎おほえんにて打はづせば亭主ていしゆかけ出で堪忍かんにんな
 らぬといふ是々そなたの虎落とらおち今時は古し當流あたらが合點がてんまいらぬそうな此柱このはしらはづして取が當世のかけ
 の乞こいやうとすこしもおどろくけしきなければ亭主ていしゆ何ともならず詫言わごころして残らず代銀濟しぬ銀子請
 取て申分まわはなけれどもいかにしてもこなたの横よこに出やうがふるい随分物ずいぶんものにかゝりしやがそれでは
 御座らぬお内義うちぎによくよくいひふくめて大晦日の晝時ひるまじ分から夫婦いさかひ仕出しお内義は着きもの
 を着かへ此家を出て行まいでは御座らぬ出て行からは人死ひとしが二三人もあるが合點がてんか大事だいじじやぞそ
 こな人ひと是非ぜいひいねかいなすにいで見しよといはるゝとき何とぞ借銭しやくせんもなして跡あと々々にて人にも云出
 さるゝやうに人は一代名いちだいなは末代まくだい是非ぜいひもない事こと今月今日百年日まねかひさてノノおもしろい事かなと何でもい
 らぬ反古ほんこを大事だいじのものやうな貌かほつきして、一枚々まいまい引さみて捨するを見てはいかなる懸乞かたごもしば
 しは居いぬもので御座るといへば今まで此手は出いだせなんだおかけによつて來年の大晦日は女房

ども是で濟すす事ことじやさてもさてもこなたは若わかひが思案しあんは一越いちここした年のくれたがひの身祝みねがひひなれ
 ばとて最前さいぜんの鶏にわとりの毛けを引ひて是こゝを吸すものにして酒さけもりしてかへして後來年の事ごらいねんまでもなし毎まい年ねん夜や
 ふけてからむつかしい懸乞かたごども來きるぞとて俄はなかにいさかひをこしらへ置およるづの事をすましかる
 誰たれいふともなく後のちには大宮通りの喧嘩屋けんかやとぞいへり

胸算用

大晦日は一日千金

卷三

一 都みやこの顔見世しよ芝居

○それくくの仕出しし羽織はおり

○大晦日の編笠はかづき物

二 餅もちはなは年の内の討めなげ

○掛取上手かけとりじやうずの五郎左衛門

○大晦日に無用の仕形舞しかたまひ

三 小判は寐姿の夢

無間の鐘つくくくと物案し

大つごもりの人置のかゝ

四 神さへお目ちがひ

堺は内證のよい所

大晦日の因果物がたり

一 都の良見世芝居

今日の三番三所繁昌と舞おさめ天下の町人なれば京の人心何ぞといふ時は大氣なる事はまことなりこれ常に胸算用して随分始末のよき故ぞかし過し秋京都に於て加賀の金春勸進能を仕りけるに四日の棧敷一軒を銀十枚づつと定めしに皆借切て明所なくしかも能より前に銀子渡しける此度大事ある關寺小町するといへば是一番の見物と諸人勇みて鼻笛を吹けるに鼓に障る事有て關寺の能組かはりぬそれさへ木戸口は夜のうちに見る人山のごとし中にも江戸の者われひとり見るために銀十枚の棧敷を二軒とりて狸々皮の敷もの道具置の棚をつらせ腰屏風枕箱其後ろに料理の間さまぐの魚鳥鬘龍に折ふしの水菓子次の棧敷に風爐釜を仕かけ、割蓋の杉手桶に宇治橋音羽川と書付してならべ醫者こふくや儒者唐物屋連歌師など入まじり其うしろの方には鳥原の揚屋四條の子供宿都にしたらる末社按摩取兵法つかひの牢人迄ひかへたり棧敷の下は供駕籠かり湯殿假雪隠何にても不自由なる事ひとつもなきやうに拵らへ榮花なる見物此心は何となく豊かなり此人大名の子にもあらず只金銀にてかく成なれば何に付ても銀もうけして心任せの慰みすべしかゝる人は

跡のへらぬ分別しての樂しみふかし身體さもなき人痛さきの金銀あだにつかふ事なかれ九月の節句過より大ぐれまでは遠い事のやうに思ひ万人渡世に油断をする事ぞかし十月はじめより日和定めがたく時雨風のはげしく人の氣も是につれておのづからそう／＼敷諸事を春の事としてのばし當分のまかなひばかりにくれければ花車商ひ諸職人の細工も思案替りてやめける次第に朝霜夕風人皆冬籠の火燧に宵寝してそれ／＼の家業外に成行さしつまりて迷惑する事なり其後法華寺の御影供淨土宗の十夜講義東福寺の開山忌參り一向宗のおとりこし又は支猪の祝儀に夜のあそび稻荷のお火焼の比河原の役者人替りて、貞みせ芝るの時は同じ入また珍らしく見る人もまたうき立けふは其座本明日は此太夫本其次は誰が座に大坂の若衆がたが出るなど沙汰して水茶屋がかねて棧敷とらせ内證より近付の藝者に花をとらせ旦那お出といはるゝまでの外聞に無用の氣をはりける提重酒がとりのぼして我宿へはすぐに歸らず石垣町の二階座敷の切狂言の踊をうつし玉城の辰巳あがりなる聲してえい山へも響きわたる程のさはぎ京に人も見しる程の者にしてあればたれ様の御ふく所となたの掛屋などいふさへ悪所のさはぎは奢りらしく見えけるましてやはした銀の商賣人たとへ氣延しに芝居見るともとなりて茂若のまぬ所を見すまし圓座かりて見て役者わか衆の

名覚えぬ者か與次兵衛が貞みせの初日にひだりがたの二軒目の棧敷に勘當切らるゝ事なかまはぬ貞付の若ひもの、五六人も風俗作り藝子に目をつかはせ下なる見物にけなりがらせける此若ひ者ども見しれる人ありて評判するを聞ば内證しらぬ事皆川西のやつらなり中京の衆ともし事に大きな貞がおかしい知らぬ人は歴々かと思ふべし黒ひ羽織の男は米屋へ入縁して欲ゆへの老女房年の十四五も違ふべし母親には二斗入の碓をふませ弟にはそら豆賣にあるかせ白柄の脇差がおいてもらいたい其次の玉むし色の羽織は牛涎屋をどこの牛の骨やらしらいで人のかぶる衣裳つき家は質に入て借銀に目安付られ東隣へは無理いひかゝつてさい目論もすまぬに遊山に出るは氣ちがひの沙汰也三番めのぎんすゝたけの羽織きたる男は利をかく銀を五貫目かりてそれを敷銀にして家具ぬしの所へ養子に行て後家親をあなづり養父の死れ三十五日もたゝぬに芝居見る事作法にはつれたる男目米薪は其日／＼に當座買の身上して酒の相手に色子どもかはいや神ならぬ身のあさましさは銀威客とおもふべしいかないかな此四五年買がかり濟したる事なしあの中に染島の羽織着たる男ちいさき錢見世出して居けるが兄に三井寺の出家を持けるが是から合力請てそこ／＼にも行先の年を越へきか其外にひとりも京の正月するものは有まじと指さして笑へばうら山しが

るかと思ひかい敷の椿水仙花にきんかん二つ三つ延紙に包みてなげ越ける明て見て又笑ひて本客ならば此きんかんひとつが銀拂ひ時二分宛にもなるべきに皆喰れ損にたるはしれた事といひ捨て芝居は果て立歸りける其のち毎日の河原通ひに同じ着物に色もかはらぬ羽織に色茶屋氣を付て銀の事申せど分も立す道切てござりければさいそくするにかひなく程なふ大晦日になりて獨は夜抜けふるしとて晝ぬけにして行方しれず又ひとり狂人分にして座敷龍又ひとりは自害しそこなひてせんさくなかば最前引合したる太鼓もち盗人の請に立けるとて町へきびしき劇茶屋は取つく島もなく夢見のわるひ寶舟尻に帆かけてにげ歸り兼ての算用には十五兩の心あて預置れしあみ笠三がいのこりて大晦日のかづき物とぞ成ける

二年の内の餅ばなは詠め

モト年の内の餅ばなは詠めトアリ

善はいそげと大晦日の掛乞手ばしこくまはらせけるけふの一日鐵のわらんじを破り世界をいだてんのかげ廻ることく商人は勢ひとつの物ぞかし數年功者のいへり惣して掛は取よい所より集めて埒明す屋としれたる家へ仕廻にねだり込、言葉質とられて迷惑せぬやうに先々腹の立やうに持

てくるときなを物靜かに義理づめに外のはなしをせず居間あがり口にゆるりと腰かけて袋持に灯挑けさせて何の因果に掛商人には生れました月額剃て正月した事なく女房共は銀親の人質になして手代に機嫌をとらせ身過は外にも有へき事と科もなき氏神をうらむ御内證は存せねども是の御内義様は佛々天弁うらにさしたる餅ばなに春の心して地鳥の鴨いりこ串貝いづれ人の内は先さかなかけが目につく物じやお小袖もなされましたで御座りましよ今は世間に皆紋所を葵付のぼたんと四つ銀杏の丸女中がたのはやり物其時々にならばして着たい女房に衣裳おまつお仕させは定めて柳すゝたけにみだれ桐の中がたで御座る同し奉公でもこんなお家に居合すが其身の仕合かたわきには今に天人からくさ目にしむなどと内義にものをいはすやうに仕かけて隙を入れれば外の借銭乞のない間を見合、此くれには何方へも拂ひいたさね共こなたは段々ことほりに至極いたした來春女ぼう共が參宮いたすつかひ銀なれども此とをりは進ずる残りは又三月前には帳を消して笑ひ貌を見ますぞと百目のうちへ六十目はわたすものなりむかしは賣がけ百目あれば八十目すまし此二十年ばかり以前は半分たしかに濟しけるに十年此かたは四分拂いになり近年は百目に三十目わたすにも是非惡銀二粒はませてわたしける人の心次第にさもしろく物かりながら迷惑はいた

せど商ひやめる外なく又節季わすれて掛帳に付置けるよろづ時世に替るもおかし前々はならぬことわりを聞とよけて大晦日の夜半かぎりに仕廻中比は又夜明方迄まはりて掛乞といへば喧嘩をせざる家一軒もなし此一兩年は更行まであるきはすれどたがひに聲をたてずひそかにしまふ事し氣をつけて見るにないといふと無いに極まり内證の事が兩隣へきこえる事もかまはず借銭は大名も負せらるゝ浮世千貫目に首きられたるためしなしあつてやらすにおかるゝものか此大釜に一步一ばいほしや根こそげにすます事じや金銀ほど片行のするものはない何としてか銀にくまれまし一た一たびは榮へとうたひて木枕鼓にして横に寐る男には何とも取て付所なし義理外聞を思はぬからは埒のあかぬ事見定め古掛は捨て當分のさし引それをたがひに了簡して腹たてずにしまふ事人みなかしこき世とぞ成けるつらく世間を思ふに随分身になる手代よりは愚かなる我子がましなり子細は自然とまことあらはれ銀集まれば皆わがものとおもふからそこ／＼にさいそくせず身の働に私なし扱また召つかひの若ひ者よく／＼親かた大事に思ひ身の上を覺悟して天理を知るは各別大かたは主の爲になるものは稀なり一日千金の色所にあそび十分請取銀あれば其内に不足こしらへあるひは小判のしかけ又は銀子請取掛を内へは鏡つかふて歸るなど親かたのたしかにし

らぬ賣がけは死帳に付捨さま／＼にわたくしする事いかに氣のつく主にてもそれ程にはならぬものぞかし又小商人の小者までもいそがしき中にかねあらしにして布袋屋のかるた一めん買て道あるき／＼八九どうに心覺へするもの親かたに徳は付ぬ事也掛乞にも色々の心ざしよきものすくなし人は盗人火は焼木の始末と朝夕氣を付るが算用のかんもんなり爰に請取普請の日用がしらにふるなの忠六といふ男常にかる口たゞき町の藝者といはれて月待日まちに物まねして人の氣に入ける。此大晦日しまひかねさる方へ銀五百目申上ればやすい事と請合給へば夜に入御見まひ申しあゝらたのしや今宵琴の音をきけば年のよらぬ仙家の心地當地ひろしと申せども此御内かたならでは外になし金銀まん／＼として四方に寶藏かくれみのかくれ笠、うち出の小槌は針口の音福々且那とひろ敷にかしこまるやうありそなる忠六此事かと五百目包なげ出せばかたじけなしといはふて三度おしいたゞき御蔭でとしを鶏がなくおいとま申してさらばとて門口まで出けるがちよこ／＼と立歸り奥様へ有がたがりましたとよろしくたのみたて奉る腰元衆といふ時仲居のきちが何と忠六どのよろこびの折なればといふ一まひ舞ましよと目出たいづくしを長々といふうちに北國より重手代歸りて只今二百貫目御くらやしきへわたすぞ米は追附のぼると仕合かね／＼

けふ奥にも琴の小うたの所かさ銀のせんさくせよといふとき忠六あがり口に置たる五百目包をとりあげて是はたくさんなる銀子何のために捨置事ぞ。高は二百貫目入ぞそれほど手前に有かないかなくば手わけして才覺せよかねよくと氣をいらちければ忠六不首尾せんかたもなく長居はおそれありといふて手ふりで歸りける。

三 小判は寐姿の夢

夢にも身過の事をわするなと是長者の言葉也思ふ事をかならず夢に見るにうれしき事有悲しき時ありさまくの中に銀拾ふ夢はさもしき所有今の世に落する人はなしそれくりに命とおもふて、大事に懸る事ぞかしいかなく万日廻向の果たる場にも天満祭りの明る日も錢が一文落てなし兎角我はたらきならでは出る事なしさる貧者世のかせぎは外になし、一足とびに分限に成事を思ひ此まへ江戸にありし時駿河町みせに裸銀山のごとくなるを見し事今にわすれずあはれことしのくれに其銀のかたまりほしや敷草の上に新小判が我等が寐姿程有しと一心によの事なしに紙ぶすまのうへに臥ける比は十二月晦日の明ぼのに女ぼうはひとり目覺めてけふの日にたてがたしと

身體の取置を案じ窓より東あかりのさすかた見れば何かはしらず小判一かたまり是はしたりく天のあたへとうれしくこちの人くと呼起しければ何ぞといふ聲の下より小判は消てなかりき扱も惜やと悔み男に此事を語れば我江戸で見し金子ほしやくと思ひ込し一念しばし小判顯はれしぞ今の悲さならばたとへ後世は取はづしならくへ沈むとも佐夜の中山にありし無間のかねをつきてなりとも先此世をたすかりたし目前に福人は極樂貧者は地こく釜の下へ焼ものさへあらず扱も悲しき年のくれやと我と悪心發れば魂入替りすこしまどろむうちに黒白の鬼車をとどろかしあの世この世の境を見せける女房此有さまを猶なげき我男に教訓して世に誰か百まで生る人なし然ればよしなき願ひする事愚かなりたがひの心替らずは行末に日出たく年も取べしわが手前を思しめしてさぞ口おしかるべしされども此まゝありては三人ともに渴命におよべばひとりある筋が後々のためにもよし奉公の口あるこそ幸はひなれ何とぞあれを手にかけてそだて給はゞ末のたのしみ捨るはむこい事なればひとへに頼みますと涙をこぼせば男の身にしては悲しくとかふことばもなく目をふさぎ女房良を見ぬ所へ墨染邊に居る人置のかゝが六十あまりの祖母さまをつれだち來てきのふも申通りこなたは乳ぶくろもよいによつてがらりに八十五匁四度の御仕着せまでかた

じけない事とおもはしやれ雲つく様な飯たきが布迄織まして半季が三十二匁何事も乳のかけじやと思はしやれ又こなたがいやなれば京町の上にも見立て置ましたけふの事なればまたといふ事はならぬと云内義きげんよく何をいたしますも身をたすかるため御座ります大事の若子さまを預りましても何と御座りましよ私わたくしはなる程御奉公の望のぞといへば男には物をいはずすこしもはやくあなたへととなりの硯すずりかつて来て一年の手形を極め残らず銀渡して彼かゝ手ばしかく後といふも同じ事は世界が此通りの御定と八十五匁數三十七と書付のある内八匁五分りんと取てさあおうほどの身みごしらへまでない事とつれ行くとき男も泪女は赤面しておまんさらばよかゝは旦那さまへ行って、正月に来てあそぶぞよといひ捨て何やら兩隣へ頼みて又泣ける。人置は心つよく親はなけれど子はそだつうちころしても死ぬものは死ませぬぞ御亭さまさらばとばかりに出て行此かみ様世を觀じ我孫のふびんも人の子の乳ばなれしはかはゆやと見歸り給へばそれは銀がかたきあの娘は死次第と其母おやがきくもかまはずつれ行ける程なふ大晦日の暮がたに此男無常發り我大分のゆづり物を取ながら胸算用のあしきゆへ江戸を立のき伏見の里に住けるも女房共が情故ぞかし大ぶくばかりいわふて成ともあら玉の春にふたりあふこそ樂しみなれ心ざしのあはれやかん

ばし二せん買置しか棚のはしに見えけるを取て一せんはいらぬ正月よとへし折て鍋の下へぞ焼ける夜ふけて此子泣やまねばとなりのかゝたちといよりて摺粉にぢわうせん入て焼かへし竹の管にて飲す事をおしへはや一日の間に思ひなしかおとがひがやせたといふ此男扱も是非なしと心腹立ちて手に持たる火ばしを庭へなげけるお亭さまはいとしやお内義様は果報さきの旦那殿がきれいなる女房をつかふ事がすきしやことに此中おはてなされた奥様に似た所がある本にうしろつきのしほらしき所が其まゝといへば此男聞もあへず最前の銀は其まゝありそれをきいてからはたとへ命がはて次第とかけ出し行て女ほう取返して泪で手を取ける。

四 神さへ御目違ひ

諸國の神々毎年十月出雲の大社に集り給ひて民安全の相談あそばし國々への年徳の神極め春の事どもを取りそぎ給ふに京江戸大坂三ヶの津へのとし神は中にも徳のそなはりしをゑらみ出し奈良堺へも老功の神達又長崎大津伏見それ／＼に神役わけてさて一國一城の所あるひは船着山市はんぢやうの里々を見たて其外都にはるかに島住ひさしの一つ屋までも餅つきて松たつる門に春のい

たらんといふ事なししかし年徳も上方へは面々に望み田舎の正月は嫌い給ふぞかしいづれふたつ取には萬につけて都の事は各別也世の月日の暮るゝ事流るゝ水のごとし程なく年波打よせて極月の末には成けるされば泉州の堺は朝夕身の上大事にかけ胸算用にゆだんなく万事の商賣うちばにかまへ表向は格子作りにしまた三層と見せて内證を奥深ふ年中入帳の銀高つもりて世帯まかなふ事也たとへば娘の子持ては疱瘡して後形を見極め十人並に人がましろ當世女房に生れ付と思へばはや三歳五歳より毎年に婢入衣裳をこしらへける又形おもしろからぬ娘はおとこ只は請とらぬ事を分別して敷銀を心當りにかし商ひ事外にいたし置縁付の時分さのみ大義になきやうに覺悟よろしき仕かたなり是によつて棟に棟次第にたちつきこけら葺のやねもそこねぬうちにさしぐれしたり柱も朽ぬ時より石で根つきをして軒の銅通數年心がけて徳を見すましていたせし手袖の不斷着起居せはしからねば是きるゝ事なく風俗しとやかに見へて身の勝手よし諸道具持傳えければ年わすれの茶の湯振舞世間へは花車に聞えてさのみ物の入るにもあらず年々世渡りをかしくしつけたる所なりよきくらしの人さへかくあればまして身體かるき家々はそろばん枕に寝た間ものびちよみの大節季を忘るゝ事もなく臺碓の赤米を紅葉の秋と詠め日まへの櫻鱈は見たか

る京の者に見せよと毎夜魚荷にのぼし客なしには江鮎も土くさいとて買ぬ所ぞかし山ばかりの京には眞鯉も喰海近き爰には磯ものにて埒を明ける惣しての事燈臺元くらし、大晦日の夜のけしき大かたに見せ付のよき商人の宿へ年徳の神の役なれば案内なしに正月仕にはいつて見れば惠方棚は釣ながらともしびもあげず何とやら物さびしく氣味のあしき内なれども爰と見立て入れれば又外の家に行て相宿もうれしからず何といはひけるぞとしばらくやうすを見しに門の戸のなるたびに女房びく／＼してまだ歸られませぬさい／＼足をひかせてかなしう御座るといづれにも同じことはりいひて歸しける程なく夜半も過明ほのになれば掛乞ども爰に集まり亭主はまだかまたかとおそろしき聲を立てる所へでつち大息つぎて歸り旦那殿はすけ松の申程にて大男が四五人して松の中へ引込命が惜くばといふ聲を聞捨てにして逃て歸りましたといふ内義おどろきおのれ主のころさるゝに男と生れて浅間しやと泣出せばかけ乞ひとり／＼出て行夜はしらりと明ける此女房人歸りし跡にてさのみなげくけしきなし時にでつちふところより袋なげ出し在郷もつまりましてやう／＼と銀三十五匁錢六百取つてまいつたといふまことに手だてする家につかはれければ内のものまでも街同然になりける亭主は納戸のすみに隠れりて因果物がたりの書物くり返し／＼讀つ

けて美濃の國不破の宿にて貧なる浪人の年を取かね妻子さし殺したる所に哀れに悲しくい
 づれ死もしさうなるものと我身につまされ、人しれず泣けるが掛念はみならず簡していにましたと
 いふこゑにすこし心定まりてふるひく立出さてくけふ一日に年をよらせしと忸みて歸らぬ事
 をなげき餘所には雜資をいはふ時分に米買焼木とゝのへ元日も常の飯たきてやうく二日の朝雜
 煮して佛にも神へも進し此家の嘉例にてもはや十年ばかりも元日を二日に祝ひます神の折敷が古
 くとも堪忍をなされとて夕めしなしにすましける神の眼にも是程の貧家とはしらず三ヶ日の立事
 を待かね四日に此家を立出て今宮の惠美酒殿へ尋入りさてもく見かけによらぬ悲しき宿の正月
 をいたしたとうき物語あそばしければこなたも年こしをしてこしめす程にもない事哉人のうちの
 見たてめしあはせの戸の白からず内義が下女のきげん取て疊のへりのきれたる家にては年をとら
 ぬもので御さる廣ひ堺中やかゝる貧者は四五人の所へ不仕合の神棚われは世界の商人が心ざしの
 酒と掛懸にて口を直して出雲の國へ歸らせ給へと馳走して留させられしを十日あびすの朝とく參
 詣したる人内陣のおものがたりを聞て歸りける神にさへ此ごとく貧福のさかいあれば況人間の
 身の上定めがたきうきよなれば定まりし家職に油断なく一とせに一度の年神に不自由を見せぬや

うにかせぐべし。

胸算用 大晦日は一日千金 卷四

目録

一 闇くらの夜の悪口

世に有人あるの衣きぬくばり
地車ぢぐるまに引隠居銀

二 奈良ならの庭にわ籠かご

萬事正月まんじやうげつ拂はらひそよし
山路さんろを越こる數かずの子

三 亭主の入替り

下り舟の乗合はな
分別してひとり機はな

四 長崎の柱餅

禮扇子は明る事なし
小見せものはしれた孔雀

一 闇の夜のわる口

65
世間胸算用
所のならはしとて關東に定置て大晦日に祭り有津の國西の宮の居籠り豊前の國はやともの和布刈
又丹波のおく山家に縁付をする里有むかしは年のくれに靈祭りしていそがしき片手に香はなをと
ゝのへ神の折敷と麻がらの箸と取ませてのせはしさに其ころのかしこき人極樂へことほりなしに
七月十四日に替ける今の智慧ならば春秋の彼岸のうちに祭るべし末々の世まで何ほど徳の行事も
しれがたし大坂生玉のまつり九月九日に定め置れ幸はひ家々に輪焼ものもする日なり我人の祝儀
なれば客人とてもあらず年々に此徳つもりて大分の事ぞかし氏子の耗をかながへ神も胸算用にて
かくはあそばし置れし又都の祇園殿に大年の夜けづりかけの神事とて諸人詣でける神前のもし
火くらふしてたがひに人貌の見えぬとき参りの老若男女左右にたちわかれ悪口のさまく云かち
にそれはく腹かゝへる事なりおのれはな三ヶ日の内に餅が喉につまつて鳥部野へ葬禮するわい
やいおどれは又入賣の請でな同罪に粟田口へ馬にのつて行くわいやいおのれが女房はな元日に氣
がちがふて子を井戸へはめおるぞおのれはな火の車でつれにきてな鬼のかうのものになりをるわ

いおのれが父は町の番太をしたやつじや。おのれがかゝは寺の大こくの果てじやおのれが弟はな術云の狭箱もちじやおのれが伯母は子おろし屋をしをるわいおのれが姉は襦袢せずに味噌買に行とて道でころびをるわいやいづれ口がましよう何やかや取まぜていふ事つきず中にも二十七八なる若ひ男人にすぐれて口拍子よく何人出ても云すくめられ後には相手になるものなし時にひだりの方の松の木の下よりそこなおとこよ正月布子したものとおなじやうに口をきくな見れば此寒きに縮入着ずは何を申ぞとすいりやうに云けるに自然と此男が肝にこたへ返す言葉もなく大勢の中へかくれて一度にどつと笑はれける是をおもふに人の身のうへにまことほど恥かしきものはなしとかく大晦日の闇を足もとの赤ひうちから合點してかせぐに追付貧方なしさても花の都ながら此金銀はどこへ行たる事ぞ年々節分の鬼が取て歸るもので御座ることに我等は近年銀と申たがひして箱に入たるかほを見ませぬと世のすぼりたる物たりして三條通りを歸れば山がたに三星の紋ぢやうちん六つとぼして車三輛に銀箱をつみ手代らしきもの二人跡につきて咄して行をきけば世界にないくといへど有ものは金銀じや此銀子は隠居の祖母への寺参り銀とて親旦那が分置れ、明暦元年の四月に蔵入して又取出すは今晩此銀箱が世間を久しぶりに見て氣のつきを晴すべし

おもへば此銀はうつくしき娘をうまれく出家にしたやうなものじやは一生涯にわたってよい事にもあはず後は寺のものになる程にと大笑ひしてけふ此銀を出す次而に向ひ屋敷の内ぐらを見れば寛永年中の書附の箱ばかりも山のごとし一代にあのごとくたまるものか惣じて世上の分限第一しはき名を取て何ぞいちもつなふては富貴には成がたきに我等が旦那は萬事大名風にして一代榮花にくらし其上の此仕合をなはりし禪入されば今迄は惣領どのに隠居したまへども二男の家をもたれければ又氣を替てそこへの隠居の望み何事も御心まかせにとて霜月はじめごろより萬の道具をはこびけふ此銀がうちどめなり面屋よりわかりて隠居付の女十一人猫も七ひき乗物にのりて人並に越れし此二十一日に例年の衣くばりと一門中下人どもかれこれ集めて男小袖四十八女小袖五十一小だち中だちの小袖二十七合て百貳十六笹屋にて調のへそれく給はりける此小袖代をもてば商ひの元手があるぞ又若旦那よりはきのふも初芝居がならぬといふてさる太夫が機嫌を見合なげきしに金子五百兩か下さるゝ京の廣ひ事をしらぬゆへ掛乞が百錢をよみける我々が見て此かた旦那兄弟金銀手にもたれたる事なしまして我分限の高をしられず九人の手代まかせなりと語りつけて大きな家作りに入て御隠居様のお銀がまいりましたと内ぐらに納めける此家

の年男神々へ燈火あげて後お銀ぐらへも燈明と申せば且那指さして笑ひさても初心な年男どの藏に燈明などといふは纒か千貫目の事也二十五六も燈明とほすかと申されしきても大分有銀と此家をうらやましく見るうちに方々より大分の銀箱廣庭につみかさね兩替の手代らしきものども手をつかへ此家のおも手代にさま／＼きげんをとり何とぞ此銀子ども御くらへおさめ申たきといへば例年申渡し御ぞんじのごとく大晦日の七つさがり候へば銀子いづかたから参りてもうけとり申さぬとかね／＼申わたし置しに夜に入て此はしたがね事やかましといひてうけとらぬを色々わびごと追匠いひて三口合して六百七十貫目渡し請とり、手形おしいたゞきて立歸るもはや御藏はしめけるとて大がまのうしろにかさね置ける此銀は庭にて年をとりけるまことに石かはらのごとし。

二 奈良の庭竈

むかしから今に同じ顔を見るこそおかしき世の中此二十四五年も奈良かよひする看屋有けるが行たびに只一色にきわめて鯛より外に賣事なし後には人も鯛賣の入助とて見しらぬ人もなくそれそれれに商ひの道付てゆるりと三人口を過けるされども大晦日に錢五百もつて終に年をとりたる事な

し口喰て一盃に雜煮いはふた分なり此男つね／＼世わたりに油斷せずひとりある母親のたのまれて火桶買ふて来るにもはや間錢取て只は通さずまして他人の事にはとりあげ祖母呼で来てやるけはしき時も茶づけ食を喰すには行かぬものなりいかに欲の世にすめばとて念佛講仲間の布に利をとるなどはまことに死がな目くじろの男なり是程にしてもあのざまなれば天のとがめの道理ぞかしそもそも奈良にかよふ時より今に鯛の足は日本國が八本に極まりたるものを一本づつ切て足七本にしてうれども誰か是に氣のつかぬ事にて賣ける其あしばかりを松ばらの煮うり屋にさだまつて買もの有さりとはおそろしの人こころぞかし物には七十五度とてかならずあらはるゝ時節あり過つる年のくれに、あし二本づつ切て六本にしていそがしまぎれに賣けるにこれもせんさくする人なく賣て通りけるに手具の町の中ほどに表にひし垣したる内より呼込鯛二盃うつて出る時法琳したる親仁ちろりを見て碁を打さして立出何とやらすそのかれたる鯛とあしのたらぬを吟味仕出し是はこの海よりあがる鯛ぞ足六本づつは、神代此かた何の書にも見えすふびんや今まで奈良中のもが一盃くうたであらふ魚屋貌見しつたといへばこなたのやうなる大晦日に碁をうつてゐる所ではうらぬといひぶんしてぞ歸りける其後誰が沙汰するともなく世間にしれてさるほどにせ

まい所は角からすみまで足きり八すけといひふらして一生の身過のとまる事これおのれがこゝろ
 からなりされば大としの夜の有さまも京大坂よりは各別しづかにしてよろづの買がかりも有ほど
 は随分すまし此節季にはならぬとことはいへば掛とり聞とどけて、二たび来る事なくさし引四
 つ切に奈良中が仕舞てはや正月の心いゑくゝに庭いろりとて釜かけて焼火して庭に敷ものしてそ
 の家内旦那も下人もひとつに樂居して不斷の居間は明置て所ならはしとて輪に入たる丸餅を庭火
 にて焼喰もいやしからずふくきなりさてまた都の外の宿の者といふ男ども大乗院御門跡の家來因
 幡といへる人の許にて例にまかせて祝ひはじめ富々富々といひて町中をかけ廻れば家ごとに餅に
 錢そへてとらせける是を思ふに大坂などにて厄はらひに同じ漸々夜も明がたの元日にたはらむか
 へくゝと賣けるは板にをしたる大くどのなり二日の明ほのに恵比酒むかへとてうりける三日の
 明がたにびしやもんむかへとてうりける毎朝三日が間福の神をうるぞかしさて元日の禮儀世間の事
 はさし置て先春日大明神へ參詣いたすに一家一門すゑくゝの親類までも引つれてさゝめきける此
 とき一門のひろきほど外聞に見えける何國にても富貴人こそうらやましけれ商賣のさらし布は年
 中京都の呉服屋にかけりて代銀は毎年大ぐれに取あつめて京を大晦日の夜半から我先に仕舞次

第にたいまつとほしつれて南都に入こむさらしの銀何千貫目といふ限りもなしすでに奈良へ歸れ
 ば皆々夜あけになれば金銀くらにうちこみ置正月五日よりたがひにとりやりのさし引する事例年
 なり此銀荷を心ろがけて大和の片里にしのびてすみける素浪人ども年とりかぬる事かなしさに
 いのちを捨て四人内談して追削に出しにみな三十貫目又は五十貫目の大分にてのぞみほどのはし
 た銀なければそれかこれかと見合すれども終に酒手と云かねて、此道かへてくらがり峠に出て大
 坂よりの歸りをまちふせし所に小おとこのかたげたる菰づつみを心にくしおもきものをかるう見
 せたるは隠し銀にきわまる所とおさへて取てにげされば此男こゑを立て明日の御用にはとても
 立まいくゝと申す時に四人してあけて見ればかずのこなり是はく

三 亭主の入替り

年の波伏見の濱にうちよせて水の音さへせはしき十二月二十九日の夜の下り船旅人つねよりいそ
 ぐ心に乗合てやれ出せくゝと聲々にわめけば船頭も春しりがほにてわれも人もけふとあすとの日
 なれば何がさて如在は御座らぬと頓て纜ときて京橋をさげける不斷の下り船には世間の色ばな

し小うた淨瑠璃はや物がたり謠に舞に役者のまねひとりも口たゝかぬはなかりしに今宵にかぎり
 てもものしづかに折々思ひ出し念佛又は長ふもないうき世正月々々と待てから死ぬるを待ばかりと
 世をうらみたる云分其ほかの人々は寐入もせずみなはらたちそふなる顔つきなるに人の手代らし
 き男がおやま茶屋でうたひならひしなげぶしを息の根のつくほどはりあげてあいの手を口三味
 線の無拍子に頭をふり廻してつらくし程なふ淀の小ばしになれば大間の行燈日あてに船を舳よ
 り逆下しにせし時分別らしき人目をさまして、あれ／＼あれを見たがよい人みなあの水車のごと
 く晝夜年中油断なくかせぎければ大節季の胸算用違ふ事なきに不斷は手をあそばして足もとから
 鳥のたつやうにばたくさとはたらきてから何の甲斐なしと我ひとり智恵有顔にいひける船中の人
 々耳をすまして是尤と聞ける中に兵庫の旅籠屋町の者乗合けるが只今のお言葉にてわれらが身
 上の事に思ひあたりました浦住居の徳には生看のつかみどりの商賣して世わたり樂々としてから
 毎年の仕舞には少づつたらず此十四五年も迷惑して大津に母方の姨有けるがわづか七拾目か八拾
 目か百目より内の御無心申せしに年々の事にて嫉もたいくついたされて當くれの合力はならぬと
 いひ切られ置たものを取て來るやうなる心あて違へば里に歸りてから年の取やうなしとかたる又

ひとりの男はさしわたし弟をつれて此たび四條の役者に近付ありて是をたのみにして藝子に出
 して前銀かりて此節季を仕舞ふ心がけにてのほりけるにおもひのほかなる事は我弟ながらかた
 ちも人にすぐれて太夫子にもなるべきものと思ひしに耳すこしちみさくて本子には仕たてがたし
 とうけとらねば是非なくつれて歸るさて／＼世間に人もあるものかな十一二三の若衆下地の子ど
 もの随分々々色品よきを毎日二十人三十人つれきたりて人置がさやくをきけば牢人の子もあり
 醫者の子も有さのみ筋目もいやしからぬ人なれどもことしのくれを仕舞ひかね奉公に出せしに十
 年切て錢壹貫から三十目までにて好なる小共取ける色の白き事かしこき事上方者にはとても及び
 がたしつかひ銀を損して歸ると語りける又ひとりの男は親の代より持傳へし日蓮上人自筆の曼陀
 羅をかね／＼宇治に望みの人ありて金銀何程成ともと申されしに其ときは賣おしく當くれ手前さ
 しつまりはる／＼うりはらひに参りしに此人いかなるゆへにや分別替りて淨土宗になられければ
 此名號手にも取られず思ひ入ちがひまして迷惑いたすなり外に當所もなければ宿へ歸りてから借
 錢乞にせまられ其相手になる事もむつかしければ大坂よりすぐに高野参りの心ざしを、見通しの
 弘法大師さぞおかしかるべし又ひとりの男は、春のべの米を京の織物屋中間へ毎年のくれに借入

の肝煎して此間銀を取定まつて緩々と節季を仕舞けるが壹石につき四十五匁の相場の米を、三月晦日切にして五十八匁に定め年々借けるに諸職人内談して、壹石に十三匁の利銀三ヶ月に出す事はいかにしてもむごき仕かけ年は何やうにもとられ次第此米借など言合せ折角鳥羽までつみのぼしたる米を其まゝに預けて歸るといふ船中の身のうへ物がたりいづれを聞てもおもひのなきはひとりもなし此舟の人々我家ありながら大晦日に内にみらるゝはあるまじ常とはかはり我人いそがしき中なれば人の所へもたづねがたし晝のうちは寺社の繪馬も見てくらしけるが夜に入て行所なし是によつて大分の借錢負たる人は五節季の際れ家に心やすき妾をかくまへ置けるといふそれは手前もふりまはしもなる人の事貧者のならぬ事ぞかし宵から小うたきげんの人定めて内證ゆるりと仕舞おかれしやうら山しやとたづねければ此おとこ大笑ひして皆々は太晦日に我人のためになり内にゐる仕出しをいまだ御ぞんじなさそふな此二三年入替りといふ事を分別してこれにてらちをあけゝるたがひにねんごろなる亭主入替りて留守をいたし借錢乞のくるときを見合お内儀わたくしの銀は外の買がかりとは違ひました亭主の腹はたをくり出してらちをあけるといへば外のかけこひどもは中々すまぬ事に思ひみなかゑりける是を大つごもりの入かはり男とて近年の仕出し

なりいまだはしぐにはしらぬ事にて一盃くはせける

四 長崎の餅柱

霜月晦日切に唐人船残らず湊を出て行ば長崎も次第に物さびしくなりぬしかし此所の家業はよろづからもの商なひの時分銀まふけて年中のたくはへ一度に仕舞置貧福の人相應に緩々とくらし万事こまかに胸算用をせぬところなり大かたの買物は當座ばらひにして物まへの取やりもやかましき事なし正月の近づくころも酒常住のたのしみ此津は身過の心やすき所なり師走になりても人の足音いそがしからず上方のごとく節季候もかねば只伊勢ごよみを見て春のちかづくをわきまへ古代の掬をまもり極月十三日に定まつて煤をはき其竹を棟木にかけ又の年のすゝはきまで置事ぞかし餅は其家くゝの嘉例にまかせてつきける殊におかしきは柱もちとて仕舞一うすを大こく柱にうちつけ置正月十五日の左義長のときこれをあぶりて祝ひける萬につけて所ならはしのおかしく庭に幸はひ木とて横わたしにして鯛いりこ串貝鴈雉子あるひは鰯赤いわし昆布たら鯉牛房大こん三ヶ日につかふほどの料理のもの此木につりさげて籠をにぎあはせすでに大晦日の夜に入

れば物もらひども貌あかくして土で作りしをびす大こく荒懸家あらいけにのせ當年このとしの惠方めぐみかたの海うみより潮うしほが参つたと家々をいはまはりけるは船着第一ふねづきの所ゆへぞかし。惣じてとし玉は他國ほかくににてもかるひ事に極まりて男は壹匁ひとむねに五拾本ごじゅうほんづつの數あふぎ女はせんじ茶を少づつ紙につみみてけいはくらしき事こゝの總並そうなみなればおかしからず兎角うさかく住なれしところ都の心ぞかしされば諸國しよこくにの商人あきんど手まはしはやくしてわが古さとの正月にあふ事を世のたのしみとせしに京の細もとでなる糸商賣いとあらいの人此二十年も長崎くだりして万事人にすぐれてかしく京都を出たち喰くて旅用意たびようい歩行路あゆみち船路ふねぢにて申々まを錢壹もんも外なる事につかはす長崎に逗留とらうの内終うちまはに丸山の遊女町あそびぢやうのそかず金山がんだんが居すがたのりこんなやら花鳥くはなとりが首すじの白いやら夢にも見ずして枕まくらに算盤そろばん手日記てにじをはなたず何とぞして唐人のおろかなるをたらしよきあきなひ事もがたとあけくれこゝろにかくれども今ほどの唐人は日本のことばをつかひおほえ持もちあます銀があるとも家賃かぢより外に借かす事なし又は歩あにあふ家かふておくをよい事と合點あつてんしければ各別かくべつなる事は唐さへなしまして日本の智恵ちゑふくろは世俗せぞくにかしくよい事ばかりはさせぬなり利發りはつにて分限ぶんげんにならば此男このおとこなれ共ともときの運うんきたらず仕合しあがてつだはねば是非せひなしおなじころより長崎にくだり同じ糸商賣いとあらいする京の人きやうの人大分おほいぶんの手前てまへ者ものとなり今は手代てしろをくだして其身

は都みやこに安樂あんらくにしてしかも物見花見女郎おんな狂くるひも相應あはにして分限ぶんげんなる人數にんずしらずこれはいかなる事にてかくは成なけるぞとたづねしにそれはみな商人あきんど人心にんしんといふものなり子細こさいは世間よを見合あ來年らいねんはかならずあがるべきものを考かんがへふんごんで買置かひの思おもひ入いあふ事より拍子ひょうしよく金銀きんぎんかさむ事ぞかしこゝのふたつものがけせずしては一生いっしやう替かる事なし此男このおとこは長崎ながさきの買かひもの京きやううりの算用さんようしてすこしも違ちがひなく跡先あとさきふまへてたしかなる事ばかりにかゝれば算用さんようの外ほかの利りを得えたる事一ひととせもなく皆銀みなぎんの利りにかきあげ人奉公ひとほうこうして氣きをこらしける毎年まいねん大晦日おほみそを橋本旅籠屋はしもとに定宿じやうしゆくこしらへ置爰おきにて年をとるが我等われらが家の嘉例かれいといふは大拂おほひらの借錢かひすましかねるゆへなり同じくは吉例きちれいやめて京きやうの我宿われしゆくにて年とるやうにいたしたきものぞかし此男このおとこつらく世よを見合あ尤なほこまへに怪我けがはなけれども皆人沙汰みなひとさたせらるゝ通り利りを得える事なし當年このとしは何なにによらず我商われあらいひの外ほかなる事ことに一ひと思案しあんして銀ぎんも受けせずばあるべからずと心中こころ極めて長崎ながさきにくだりさまゝ分別ぶんべつせしに銀ぎんでかねもふくる事ばかりにて只ただとる様な事はひとつもなしとかく來春らいはるの小芝居おとしご何なにぞ替かつたみせものもがな京大坂きやうだいざかの細工人こさいくじんも手をつくして色々いろく仕出しだし何かめづらしからねばものにもしも有あべしとせんさくして大かたの物にては錢ぜには取とりたしと吟味ぎんみするに定じやうまつてよいものは今まで見せぬ鱈たら龍りゆうの子こ又また火喰くわく鳥とりなどいまだ見せた事

なしこれは長崎にも稀なれば自由に手に入がたしひそかに唐人をかたらひ何と異國にかはりたるものはないかといへば鳳凰も雷公も聞たばかりにて見た事なしかく伽羅も人蔘も日本に稀なるものは唐にもすくなしことに銀たいせつとおもへばこそ百千里の風波をしのぎ命を銀と替る商ひにのぼりけるにて世に銀ほど人のほしきものはないと合點いたされよとかたりけるこれ尤とおもひ身のかせぎに油斷なく色々のわたり鳥調へて都にのぼりしにみな見せて仕舞し跡なればひとつも錢に成がたく人の見付たる孔雀はまだもすたらず漸本銀取返しぬ是を思ふにしたら事がよしとぞ

胸算用

大晦日は一日千金

卷五

目録

一 つまりての夜市

文反古は恥の中々

いにしへに替る人の風俗

二 才覺の軸すだれ

親の目にはかしこし

江戸廻しの油樽

三 平太郎殿

かしましのお祖母を返せ
一夜にさま／＼の世の噂

四 長久の江戸棚

きれめの時があきなひ
春の色めく家並の松

一 つまりての夜市

萬事の商なひなふて世間がつまつたといふは毎年の事なりたとへば十匁に相場極まりて賣買いたせし物を九匁八分にすれば時の間に千貫目が物も買手有又十匁に買ば即座に貳千貫目がものも賣手有是をおもふに大場にすめる商人の心だま各別に廣し賣も買もみな人々の胸さんようぞかし世になきものは銀といふはよき所を見ぬゆへなり世にあるものは銀なり其子細は諸國ともに三十年此かた世界のはんじやう目に見えてしれたり昔わら葺の所は板びさしと成月もるといへば不破の關屋も今はかはら葺に白土の軒も見え内くら庭藏大座敷のふすまにも砂粉はひかりを嫌ひ泥引にして墨繪の物ずき都にかはる所なし又灘の鹽やきはつげの小ぐしもさゝでと誦しにかゝる浦人も今は小袖ごのみして上方にはやるといふ程の事を聞あはせ見おほえ千本松のすそ形もふるし當年の仕出しは夕日笹のもよふとぞといまだ京大坂にもはしくはしらずして申がたのしのぶ小桐の衣装きるうちにはやいなかに京ぞめはしやれたりむかしもよりの肩さきから染込の郭公の二字又はぶどうだなの所々につるはの赤ねの染入おかし見し時は格別ぞかし何國に居ても金銀さへもち

ければ自由のならぬといふ事なしことさら貧者の大節季何と分別しても涙がたしなないといふてから銭が壹文おかぬ棚をまぶりてから出所なしこれを思へば年中始末をすべし日に壹文つつ暮らしてのばしければ壹年に三百六十文十年に三貫六百なり此心から算用すれば茶焼木味噌萬事に何ほどの貧家にて一年に三十六匁の違ひ有十年に三百六十目是に利をもちかけて見るときは三十年につもれば八貫目餘の銀高なり惣じてすこしの事とて不斷常住の事には氣をつけて見るべしこ
 とにむかしより食酒を呑ものはびんぼうの花ざかりといふ事有爰に火ふくちからもなき其日過の釘鍛冶お火焼に稲荷どのへ進ぜたるお神酒徳利のちいさきに八文づつがはした酒日に三度づつ買ぬといふ事なく四十五年此かた呑くらしける此酒の高毎日小半づつにして四十石五斗なり毎日二十四文の銭つもり十二匁にして銀に直し四貫八百六十目なり此男下戸ならば是ほどに貧はせまじきものと笑ふ人あれば此鍛冶我家おさめたる貌つきして世中に下戸のたてたる藏もなしと
 うたひてまた酒をぞ呑ける既に其年の大晦日にあらましに正月の用意をしてほうらいは飢りながら酒小半もとむる銭なくてこのたらざる宿さびしく四十五年此かた一日も酒のまぬ事のなきに日もこそあれ元日に酒なくては年をこしたる甲斐はなしと夫婦さま内談するに酒手の借と

ころなく質種もなくやう／＼思案めくらして過つるあつさをしのぎしあみ笠いまだ青々としてそこねもやらすありけるをこれ來年の夏までは久しき事なりたからは身のさしあはせこれをうりて當座の用にたつるより外なしとすでに立ざりたる古道具の夜市にまぎれて世間のやうすを見るに大かた行所なき借錢負の貌つきぞかし宿の亭主は賣口錢一割のきほひにかゝつてふり出しけるこよひになつてうるほどのものよく／＼さしつまつて皆あはれなり十二三なる娘の子の正月布子と見えてもえぎ色に染かのこの洲崎うらはうす紅にして中綿もおしまず入ていまだ袖口もくけずしてこれを穿はないか／＼とせりければ六匁三分五りんづつに落けるよもや裏ばかりも出来まじ其次に丹後の細口の鱒を片身賣に出しけるこれもあまらず二匁二分五りんにうられる其跡から二疊釣の蚊屋出して八匁より二十三匁五分までせりのほしけるにうらずして置ける是は商ひならぬはづなり蚊屋大晦日迄質におかず持たる身代なればたのもしき所ありと笑らひけるそのち十枚つぎの蠟地の紙に御免筆の名印ましてしたるを賣けるに一分からやう／＼五分までねだん付ければそれはいづれもあまりなる事紙ばかりが三匁が物が御座るといへばいかに／＼何もかかずにあれば三匁が紙なり無用の手本書て五分にも高したとへいかなる人の筆にもせよ是をふんどしと

いふ手しやといふそれはいかなる事ぞといへば今の世に男と生れ是程かゝぬものはないによつてこれをふんどし手とぞ笑ひける扱又これはわれものくゝと大事にかけて出しけるは南京のさしみ皿十枚其へだてに入たる京大坂の名ある女郎の文がらなりこれはといそがしきによりて見るに皆十二月の文どもはいとしかはいのおもひをさつて近ごろ申かね候へどもと無心の文ばかりなり戀も無常も銀なくては成がたし此皿のぬしも定めて大じんといはれて此ふみ一つが銀一枚づつにもあたるべし然れば皿よりは其反古に大分のねうちありとておのくゝ大わらひしける其跡に不動一體とつこ花さられい錫杖ごまの壇の仕廻ものさてくゝ此不動も我身上の富貴は祈られぬ物よと沙汰しける時にくだんのあみ筭出せば其座に賣ぬしの居るもかまはずあはれやくゝ此筭幾夏かきるためとてふるきこかみにて紙ぶくろして入てさても始末なやつがうり物ぞと三文からふり出して十四文に賣て此錢うけとる時は此五月に三十六文に買て何々のせいもん庚申参りに只一度かづき其まゝといひけるも其身の恥のおかし其夜の仕舞に歳暮の神扇の箱二十五たばこの入し箱ひとつで三匁七分に買て歸りしにたばこ箱の下に小判三兩入置きしは思ひもよらぬ仕合なり

二 才覺のぢくすだれ

宵の年のせつなき事をわすれがたく來年からは三ヶ日過ぎたらば四日より商賣に油斷せず万事を當座ばらひにして錢のないときは肴も買ぬがよし諸事を五節供切と胸算用を極め借錢乞のこはい心をすぐに正月に成けることしは今までの嘉例をいはる替るとて十日の帳とちを二日に取こし五日にせし棚おろしを三日にして俄かに身の取まはしかしくとかく宿を出るからに思ひよらぬ銀をもつかひ物見もの参りにさそはれ大事の日をむなしうくらす事無分別とおもひ定めて商賣の事より外には人とものをもいはず、毎日心算用して諸事に付て利を得る事のすくなき世なれば内證に物のいらざるしあん第一と心得て三月の出替りより飯たきを置す女房にまへだれさせて我も晝は旦那といはれてみせにゐて夜は門の戸をしめ置いてでつちがふみ碓を助てとらせ足も大かたは汲たての水で洗ふほどに氣を付け共これかやあをちびんぼうといふなるへし又それほどにあきなひ事なくていよく日なたに氷のごとし何としても一升入柄杓へは一升よりはいらすとむかしの人の申傳えしされは熊野びくにか身の一大事の地ごく極樂の繪圖を拜ませ又は息の根のつよくは

どはやりうたをうたひ勸進をすれとも腰にさしたる一升びしやくに一盃はもらひかねける。さる程に同じ後世にも諸人の心ざし大きに違ひ有事哉多とし南都大佛建立のためとて龍松院たち出給ひ勤を修行にめぐらせられ信心なき人は進め給はず無言にてまはり給ひ我心ざしあるはかりを請たまふも一升びしやくなるに一步に一貫十歩に十貫あるひは金銀をなげ入れ釋迦も錢ほど光らせ給ふ今佛法の晝ぞかし是は各別の寄進とて八宗ともに奉伽の心ざし殊勝さ限りなかりきすでに町はづれの小家かちなる所までも長者の方貫貧者の壹文これもつもれば一本拾二貫目の丸柱ともなる事ぞかし是もおもふに世はそれ／＼に氣を付けてすこしの事にもたくはへをすべし分限に成けるものは其生れつき各別なりある人のむすこ九歳より十二のとしのくれまで手習につかはしけるに其間の筆のぢくをあつめ其外人のすてたるをも取ためて程なく十三の春我手細工にしてぢくすだれをこしらへ壹つを一匁五分づつの三つまで賣拂ひはじめて銀四匁五分もうけし事我子ながら只ものにあらずと親の身にしては嬉しさのあまりに手習の師匠に語りければ師の坊此事をよしとは譽給はず我此年まで數百人子共を預かりて指南いたして見およびしに其方の一子のごとく氣のはたらき過たる子共の末に分限に世をくらしたるためしなし又を食するほどの身躰にもならぬもの

中分より下の渡世をするもの也かゝる事にはさまざまの子細ある事なりそなたの子斗をかしこきやうにおほしめすなそれよりは手まはしのかしこき子共有我當番の日はいふにおよばず人の番の日もはうきとり／＼座敷はきてあまたの子共が毎日使捨たる反古のまろめたるを一枚々々しはのばして日毎に屏風屋へうりて歸るもあり是は筆の軸をすだれのおもひつきよりは當分の用に立事ながらこれもよろしからず又ある子は紙の餘慶持來りて紙つかひすこして不自由なる子共に一日一倍ましの利にて是をかし年中につもりての徳何ほどといふ限りもなしこれらはみなそれ／＼の親のせちがしこき氣を見ならひ自然と出るおのれ／＼が智慧にはあらずその中にもひとりの子は父母の朝夕仰せられしは外の事なく手習を精に入よ成人しての其身のためになる事との言葉反古には成がたしと明くれ讀書に油断なく後には兄弟子どもすぐれて能書に成ぬ此心からは行末分限になる所見えたり其子細は一筋に家業かせぐ故なり惣じて親より仕つゞきたる家職の外に商賣を替て仕つゞきたるは稀也手習子どもおのれが役目の手を書事は外になし若年の時よりすゞどく無用の欲心なりそれゆへ第一の手はかゝざることあさましその子なれどもさやらの心入よき事とはいひがたしとかく少年の時は花をむしり紙鳶をのぼし智慧付時に身もちかためたるこそ道

の常なれ七十になるものゝ申せし事ゆくすゑを見給へといひ置れし師の坊の言葉にたがはず此者共我世をわたる時節になつてさま／＼にかせぐほどなりさがりて軸すだれせしものは冬日和の道のために草履のうらに木をつけてはく事仕出しけれどもこれもつゞきて世にはやらすまた紙くちあつめしものはちやんぬりのかはらけ仕出して世にうれども大晦日にもともし火ひとつの身だいなり又手ならひばかりに勢を入れたるものは物ごとくとく見ゑけるが自然と大氣に生れつき江戸まはしのあぶら寒中にもこほらぬ事を分別仕出し樽に胡椒一粒づつ入る事にて大分利を得て年をとりけるにおなじおもひつきにて油がはらけと油樽と人の智慧ほどちがふたる物はなかりし

三 平太郎殿

古人も世帯佛法と申されし事今以て其通り也毎年節分の夜は門徒寺に定まつて平太郎殿の事讃談せらるゝなり聞たびに替らぬ事ながら殊勝なる義なれば、老若男女ともに参詣多し一とせ大晦日に節分ありて掛乞厄はらひ天秤のひゞき大豆うつ音まことにくらがり鬼つなぐとは今宵なるべしおそろしさて道場には太鼓おとづれて佛前に御あかしあげて参りの同行を見合けるに初夜の鐘

をつくまでにやう／＼参詣三人ならではなかりし亭坊つとめ過てしばらく世間の事どもをかんがへされば今晚一年中のさだめなるゆへそれ／＼にとまなく参りの衆もないと見えまし然れども子孫に世を渡し隙のあききたるお祖母たちはけふとても何の用あるまじ佛のおむかひ船が来たらばそれにのるまいといふ事はいはれまじおろかなる人ごころふびんやなあさましやなさりながら只三人にきかせましてさんだんするも益なしに佛の事にも爰が胸算用で御座る中々燈明の油錢も御座らねばせつかく口をたゞいても世の耗なり面々に賽錢取返して下向して給はれ皆世わたりの事共にからまされ参詣もなき所に各きどく千万爰を以信心如来もいそがしき中に足をはこび給ふをそんにはせさせ給はぬ也金の帳に付おかせられて未來にて急度算用し給ふなればかならず／＼捨たるとおぼしめすな佛は慈悲第一すこしもいつはり御座らぬたのもしうおぼしめせ時にひとりの祖母泪をこぼし只今の有がたひ事をうけたまはりまして扱も／＼我心底の恥かしう御座ります今夜の事信心にて参りましたでは御座らぬひとりあるせがれめがつね／＼身過に油断いたしましたして借錢に乞たてられまして節季／＼にさま／＼作り事申してのがれましたが此節季の身ぬけ何とも分別あたはず私には道場へまいれ其跡にて見えぬとなげき出し近所の衆をたのみ

大鼓かねをたゞきたつねこれにて夜をあかして濟すべしふるい事ながら大晦日の夜の御祖母を返せば我等が仕出しと思案して世のふしようなればとてあたりの衆におもはぬやつかいかくる事は大きな罪とぞなげきける又一人は生國は伊勢のものなるが人の縁ほどしれぬものはなし爰許に親類とてもなきに大坂旦那廻りの太夫どのにやとはれ荷持をいたせし時此所の繁昌見まして何をすればとてふたり三人の口を喰事心やすき所と見たて幸はひ和がよひして小間物商ふ人の死跡にふたつになる男の子あつてかゝも色じろにたくまじければとも過にして世をわたり、行末は其子めにかゝる事をたのもしくおもひ入聲していまだ半年もたゞぬに道をしらぬかよひ商ひにすこの錢もみなになし極月はじめごろより何がなと渡世しあんずるうちに女は子を愛して我も耳があるほどに人のいふ事をよくきけ小男でも本のとゞさまは利發にあつたとおもへ女の手わざの食までたきて女房は宥からねさせ置て我は夜明がたまでわらんじをつくりわれは着すに女房子どもには正月布子をこしらへ此黄がらちやのきるものも其時の名こりじやそ何に付てもなじみほどよきものはなしものととゞさまこひしやとなけくといふときはざりとては入聲口おしく勘忍ならぬ所なれども是非なく日をかさね我ふるさとにすこし賃置たる銀子もあればこれを取あつめて此

節季仕舞とはるくくだりける甲斐もなく其ものどもはみな所をされば又手ぶりにてやうくけふの夕食前に宿へ歸りしに何とか才覺いたしける餅もつき薪も買神のおしきに山くさの色めきければ世はなげくまじ又引あぐる神も有て留守のうちに手廻しよく内證仕舞置けるとうれしく無事で歸りたるといへば女房もいつよりは機嫌よくして先足の湯を取もあへず鯨鮓を片皿に赤いはしの焼ものにて心よく膳をすへける程に箸とつて喰かゝる時伊勢の銀どもは取てござつたかといふ不仕合いふを聞もあへずそなたは手ぶりでようもく戻られた事じや此米は壹斗を二月の晦日切に約束してわれらが身を手形に書入て九拾五匁の算用にして借ましたよ世間は四拾目の米喰とまき九十五匁の米を喰事そなたのどんなるゆへにかゝる仕合持て御座つたものはふんどし一筋何もそののまいらぬ事夜に入は闇うなります足もとのあかいうちに出て御座れと喰かゝつた膳をとつて追出す時近所のもの共あつまりて是は御亭さまのめいわくながら入聲のふしやうに出ていなしやるが男の本意じや又よい所も御座ろと口々に追出しければあまりかなしくて泣れもせず明日は國元に歸る分別いたしましたが今夜一夜のあかし所なく我らは法華宗なれ共是へ參りましたと身のさんげする事哀れにも又おかし又ひとりの男は大わらひして我身の事はとかふ申がたし宿にい

ますれば方々よりいけておかぬ身なりどなたへ申して錢十文かり所はなし酒は呑たし身はさむし色々無分別年を越べき才覺なし近ごろ のさましきおもひつきながらこよひは道場に平太郎殿の談参り群集すべし其草履雪踏を盗み取て酒の代にせんと心がけしにこゝにかぎらずいづかの道場にも人ぎれなくほとけの目をぬく事も成がたしと身のうへをかたりて泪をこぼしける亭坊も横手をうつてさてもく身の貧からはさまく悪心もおこるものぞかし各もみた佛體なれども是非もなきうき世ぞとつらく人界を觀じ給ふうちに女けはしくはしり來て姪御さま只今安々と御平産あそばしました御しらせ申ますといふ程なく其跡より箱屋の九藏今のさきに掛こひと言分いたされまして首しめて死れまして御ざる夜半過に葬禮いたします御くろうながら野墓へ御出たのみますといふて來る取まぜてかしましき中に仕たてもの屋より縫に下されました白小袖をちよろりと盗まれましたせんさくいたしまして出ませずは銀子たてまして御そんはかけますまいとことはり申に來る東隣から御無心なれども今晚俄かに井戸がづぶれました正月五ヶ日水がもらいましたいと申きたる其跡から一旦那のひとり子金銀をつかひすこし首尾さんくにて立のくを母親の才覺にて御坊さまへ正月四日まで預けにつかはしける是もいやとはいはれずうき世に住から師

走坊主も隙のない事ぞかし

四 長久の江戸棚

天下泰平、國土萬人江戸商ひを心かけ其道々の棚出して諸國より荷物船路岡着の馬かた毎日數万駄の間屋づきこゝを見れば世界は金銀たくさんなるものなるにこれをもうくる才覺のならぬは諸商人に生れて口おしき事ぞかしさるほどに十二月十五日より通り町のはんじやう世に寶の市とは爰の事なるべし常のうりもの棚は捨置て正月のけしき京羽子板玉ぶりく細工に金銀をちりばめはま弓一挺を小判二兩などにも買入ありけるは諸大名の子息にかぎらず町人までも萬に大氣なるゆへぞかし町すじに中棚を出して商ひにいとまなく錢は水のごとくながれ白かねは雪のごとし富士の山かげゆたかに日本橋の人足百千万の車のごとく聞なしたり船町の魚市毎朝の賣張四方の海ながら浦々に鱗のたねも有事よと沙汰し侍る神田須田町の八百屋もの毎日の大根里馬に付つきて數万駄見えけるはとかく島ありくがごとし半切にうつしならべたる唐がらしは秋ふかき龍田山をむさし野に見るに似たり瀬戸物町麴町の雁鴨さながら雲の黒きを地にはへたるがごとし

本町の呉服もの五色の京染やしき模やうのちらしがた四季一度にながめすがたのはなの色香ぞかし傳馬町のつみ綿みよしの、雪のあけぼのの山々夕べにはちやうちんつらなり道明らかう大晦日の夜に入て一夜千金家々の大商ひ殊に足袋雪踏は諸職人万事買物のおさめにし夜の明がたに調へに來たり一とせ江戸中の棚にせきだが一足たびか片足ない事有幾万人はけばとてかゝる事は日本第一人のあつまり所なれば也宵のほどは一足七八分のせきだ夜半過には壹匁二三分となり夜明がたには一足貳匁五分になれ共買人ばかりにしてうるものなし一とせ掛小鯛二枚十八匁宛せし事も有代々ひとつ金子貳歩づつせしに高ふて買ぬといふ事なし京大坂にては相場ちがひのものはたとへ祝儀のものにしてから中々調ふへき人心にはあらず爰を以て大名氣とはいへり京大坂に住なれて心のちいさきものも其氣になつて錢をよむといふ事なし小判をりんだめにてかける事なしかるきをとれば又其まゝにさきへわたし世は廻り持のたからなればひとりとして吟味する事にはあらず十七八日までに上方へ銀飛脚の宿を見しに大分の金銀色もかはらず上りてはくだり一とせに道中を幾たびか金銀ほど世に辛勞いたすものは外になし是ほど世界に多きものなれども小判一兩もたずに江戸にも年をとるもの有されば歳暮の御使者として太刀目録御小袖樽さかな箱入のらう

そく何を見ても萬代の春めきて町並の門松これぞちとせ山の山口なを常盤橋の朝日かけ豊かに靜かに民の身に照そひくもらぬ春にあへり

元祿五壬申年初陽吉日

書肆

京二条通堺町

上村平左衛門

江戸青物町

萬屋清兵衛

大坂梶木町

伊丹屋太郎右衛門

板行

版書科教康文波岩

22

昭和七年四月八日印刷
昭和七年四月十一日發行

世間胸算用*

定價二十錢

校訂者

和田萬吉

發行者

東京市神田區一ツ橋通町三番地
岩波茂雄

印刷者

東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目
菊地眞次郎

株式會社秀英印刷

發行所

東京市神田區
一ツ橋通町三番地

岩波書店

電話 〇一八七
九段 〇一八九
振替口座東京 二六三〇
小賣部專用

岩波文庫教科書版目録

装幀 四六
表紙 フワイバ
刊

第一編	古事記	幸田成友校訂	定價二十錢
第二編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價一四
第三編	白文萬葉集	佐佐木信綱校訂	定價八十錢
第四編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價八十錢
第五編	新訓萬葉集	佐佐木信綱編	定價六十錢
第六編	古今和歌集	尼上八郎校訂	定價四十錢
第七編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價四十錢
第八編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價四十錢
第九編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價四十錢
第十編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價六十錢
第十一編	源氏物語	鳥津久基校訂	定價六十錢

第十二編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十三編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十四編	枕草子	池田龜鑑校訂	定價四十錢
第十五編	大鏡	和田英松校訂	定價四十錢
第十六編	新古今和歌集	佐佐木信綱校訂	定價六十錢
第十七編	平家物語	山田孝雄校訂	定價四十錢
第十八編	平家物語	山田孝雄校訂	定價六十錢
第十九編	徒然草	西尾實校訂	定價二十錢
第二十編	奥の細道	伊藤松宇校訂	定價二十錢
第二十一編	日本永代藏	和田萬吉校訂	定價二十錢
第二十二編	世問胸算用	和田萬吉校訂	定價二十錢

附記——本叢書は、高等諸學校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般國文學研究者に取つて非常に便利な書入本となり得ると信じます。

德和歌後萬載集 野崎左文校訂	松の葉 藤田徳夫原註	好色一代男 和田萬吉校訂	好色一代女 和田萬吉校訂	好色五人女 和田萬吉校訂	日本永代藏 和田萬吉校訂	世間胸算用 和田萬吉校訂	西鶴織留 和田萬吉校訂	武家義理物語 和田萬吉校訂	椿説弓張月 上巻 和田萬吉校訂	椿説弓張月 中巻 和田萬吉校訂	椿説弓張月 下巻 和田萬吉校訂	性善合 和田萬吉校訂	羅の橋三重帷子 和田萬吉校訂	心中天の鶴 和田萬吉校訂	胡蝶物語 和田萬吉校訂	浮世風呂 和田萬吉校訂	浮世末 和田萬吉校訂													
東海道膝栗毛 和田萬吉校訂	加賀 和田萬吉校訂	赤垣源藏・仲光 和田萬吉校訂	忍ぶ屋 和田萬吉校訂	孝子善吉 和田萬吉校訂	鼠小僧 和田萬吉校訂	實録先代萩 和田萬吉校訂	お藤の平右衛門 和田萬吉校訂	小説・戯曲・詩歌・隨筆・評論	こゝろ 和田萬吉校訂	道草 和田萬吉校訂	行旅 和田萬吉校訂	深草 和田萬吉校訂	草枕 和田萬吉校訂	坊つちやん 和田萬吉校訂	五重塔 和田萬吉校訂	風流佛・一口劍 和田萬吉校訂	二人女 和田萬吉校訂	觀音岩 和田萬吉校訂	觀音岩 和田萬吉校訂	にげくり 和田萬吉校訂	新曲 和田萬吉校訂	運命論者 和田萬吉校訂	源をち 和田萬吉校訂	號外 和田萬吉校訂	櫻の實の熟する時 和田萬吉校訂	千曲川のスケッチ 和田萬吉校訂	幸福者 和田萬吉校訂	蒲團・一兵卒 和田萬吉校訂	田舎教師 和田萬吉校訂	小僧の神様 和田萬吉校訂

其解・或る男 志賀直哉著	陸奥直次郎 長興善郎著	青銅の基 長興善郎著	偷盜 芥川龍之介著	入江のほとり 正宗白鳥著	生きたらば 正宗白鳥著	大石良雄 野上彌生子著	海神丸 野上彌生子著	出家とその弟子 倉田百三著	布施太子の入山 倉田百三著	その妹 武者小路實篤著	人間萬歳 武者小路實篤著	波瀾 山本有三著	病牀六尺 正岡子規著	墨汁一滴 正岡子規著	仰臥漫錄 正岡子規著	子規歌集 正岡子規著	左千夫歌集 曹藤茂吉校訂	上田敏詩抄 茅野巖々編	晚翠詩抄 土井晚翠著	藤村詩抄 島崎藤村自選	有明詩抄 蒲原右明著	泣蓮詩抄 藤田泣蓮著	文道遺稿 金瓶梅詞話	歌舞音樂略史 小中村清知著	俗樂旋律考 上原六郎著	蘭學事始 野田元白著	茶の本 村岡博著	綱島梁川集 安倍能成編	清澤文 清澤源之著	福澤撰集 福澤諭吉著	北村透谷集 島崎藤村編	海舟座談 巖谷本善治編	外國文學(小説・戯曲・詩)	杜詩卷之一 藤田又四郎譯註	杜詩卷之二 藤田又四郎譯註	杜詩卷之三 藤田又四郎譯註	杜詩卷之四 藤田又四郎譯註	陶淵明集 藤田又四郎譯註	唐詩選 上巻 藤田又四郎譯註	唐詩選 下巻 藤田又四郎譯註	即興詩人 上巻 藤田又四郎譯註	即興詩人 下巻 藤田又四郎譯註	即興詩人 外傳 藤田又四郎譯註	フランソワ 角田俊作譯	幽霊 小宮豊隆譯	稲妻 小宮豊隆譯	父娘 小宮豊隆譯	合嬢ユリ 茅野巖々譯	オネーギン 米川正夫譯	イワシ 久一郎譯
-----------------	----------------	---------------	--------------	-----------------	----------------	----------------	---------------	------------------	------------------	----------------	-----------------	-------------	---------------	---------------	---------------	---------------	-----------------	----------------	---------------	----------------	---------------	---------------	---------------	------------------	----------------	---------------	-------------	----------------	--------------	---------------	----------------	----------------	---------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-----------------	-------------------	-------------------	--------------------	--------------------	--------------------	----------------	-------------	-------------	-------------	---------------	----------------	-------------

れる様に、小さい形の中に、澤山の内容が盛り込まれました。
 □騰求の自由 しかる讀者が全く自由に欲しい本を隨時求められる自由選擇の方法を採りました。
 □印刷の鮮明、校正の精確、製本の堅牢等の實際的方面に於ても亦最善を期します。
 □體裁は菊半裁判、紙裝、平福百穂畫伯裝幀
 □活字は八ポイントを用ひました。
 □約百頁を單位として星一つを以てそれを現はし、★一つ毎に二十錢の定價です。
 □★一つを1に算へて此の文庫の番號を進めてゆきます。
 □番號はただ發行順に従つて之を追ふものであります。
 □★★或は★★★は、それぞれ二百頁或は三百頁の本一冊なることを示し、百頁づつの分冊ではありません。
 □送料(及び定價)は左表の通りです。
 ★ 定價二十錢 送料二錢
 ★★ 四十錢 四錢
 ★★★ 六十錢 四錢
 ★★★★★ 八十錢 六錢

★★★ 一冊 六錢
 □御註文は前金で御願ひ致します。小さい本で極度の廉價なものですから必ず送料はお添へ下さい。切手代用は一切増に願ひます。

◆岩波文庫新刊書目◆

- | | | |
|-----------------------------|-----------------------|------|
| 源氏物語 | 島津久基校訂 | ★★★★ |
| 三條西榮花物語中卷 | 三條西公正校訂 | ★★ |
| 煤 | 煙森田草平作 | ★★ |
| 支那通俗古今奇觀 | 青木正兒校訂 | ★ |
| 獅子座の流星群 | ロマン・ロラン作
片山敏彦譯 | ★ |
| マルクス神聖家族或は
エンゲルス批判的批判の批判 | 石堂清倫譯
木 清譯 | ★★★ |
| 科學的に見たる
科學的宇宙觀の變遷 | スワンテ・アールニウス著
寺田寅彦譯 | ★★ |

終

